

指標詞と指示詞

指示と意味の関係に対するフレーゲ的説明と反フレーゲ的説明

Indexicals and Demonstratives

Fregean and Anti-Fregean Accounts of the

Relation between Reference and Sense

村 越 行 雄

要 旨

言語哲学において重要な研究領域として位置付けられている指示研究には、フレーゲ的研究方法と反フレーゲ的研究方法（いわゆる指示の新理論家の研究方法）の対立が全般にわたって見られる。本稿では、特に指標詞と指示詞を取り上げて、その対立点を検討するのが目的であり、具体的には指標詞と指示詞に対するフレーゲ本人の説明、そしてそれに対立するペリーとウェットスタインの説明を比較・検討することになる。なお、一般的に解釈されているフレーゲ像が、必ずしもフレーゲの真意を反映しているものとは言いがたく、従って擁護するにしても、また批判するにしても、フレーゲの主張をより正確に解釈する必要があり、その意味で指標詞と指示詞に対するフレーゲの説明を多少詳細に検討し、それに続いてフレーゲの主張を批判するペリーとウェットスタインの主張を明確にする為に、指標詞と指示詞に対するペリーとウェットスタインの説明を比較・検討することにする。指標詞と指示詞に対する説明の相違は、単純な言い方をすれば、指標詞と指示詞の指示（指示物）が意味によって決定されるのか、それとも言語的意味と文脈的要素によって決定されるのかの対立によるもので、その点を具体的に検討していくことになる。

Key words : indexicals (指標詞), demonstratives (指示詞), reference (指示), sense (意味), modes of presentation (表示方法), Frege (フレーゲ), Perry (ペリー), Wettstein (ウェットスタイン)

1. はじめに

分析哲学において偉大な業績を残したものとすれば、それは Gottlob Frege から始まり、Bertrand Russell を経由して、Saul Kripke と Gareth Evans に至る指示哲学であると Simon Blackburn⁽¹⁾が述べているように、確定記述 (definite descriptions)、固有名 (proper names)、指標詞 (indexicals)、指示詞 (demonstratives) などの指示に関しては、実に数多くの議論が生み出され、そうした過程の中から様々な業績が出現してきたし、現在でもそれは継続している。指示に関する議論は、Frege の理論を出発点として、またそれを基盤として批判・修正・改善を繰り返しながら展開されてきたと言えるが、あくまでも Frege の基本原則を受け入れながらフレーゲの立場を守る流れと、それを根本から崩していく反フレーゲ的立場に立つ流れ (例えば、代表的な哲学者として Keith Donnellan, David Kaplan, Saul Kripke, John Perry, Hilary Putnam などが挙げられよう) に区別して考えていくことができよう (勿論、そうした単純な分類は、実情を正確に反映していないばかりか、混乱と誤解を生む結果になるであろうが、20世紀初頭から始まる指示に関する議論の流れを大雑把に知る上では便利なものであろう)。そして、本稿で取り上げる指標詞と指示詞に関しても、例外ではない。そこで、フレーゲ的立場と反フレーゲ的立場の相違を明確にする目的で、今回は Frege の英訳論文 “Thoughts” (独語版1918, A. M. and Marcelle Quinton の英訳版1956, P. T. Geach and R. H. Stoothoff の英訳版1977。今回は1977年の英訳版を使用)⁽²⁾、Kaplan の論文 “On the Logic of Demonstratives” (1978)⁽³⁾、Perry の二論文 “Frege on Demonstratives” (1977)⁽⁴⁾ と “The Problem of the Essential Indexical” (1979)⁽⁵⁾、Howard Wettstein の三論文 “Indexical Reference and Propositional Content” (1979)⁽⁶⁾、“How to Bridge the Gap between Meaning and Reference” (1984)⁽⁷⁾、そして “Has Semantics Rested on a Mistake?” (1986)⁽⁸⁾ を具体的に検討していくことにする。更に、フレーゲ的立場をより一層鮮明にする為に、Michael Dummett, Evans, Harold Noonan などの論文も検討することにする。

2. 「指標詞」と「指示詞」の用語に関して

本稿で扱うことになる I, you, he, she, here, there, now, today, yesterday, this, that などを指標詞と呼ぶべきか、それとも指示詞と呼ぶべきかの問題は、必ずしも明確にされているとは言えない。前掲の論文を例として使用すれば、“On the Logic of Demonstratives” と “Frege on Demonstratives” では、指示詞と呼ばれているが、“Indexical Reference and Propositional Content”, “Has Semantics Rested on a Mistake?”, そして “The Problem of the Essential Indexical” (特に、I, now, this, そして that は、本質的な指標詞とされている) では、指標詞と呼ばれているのである。そのことから言えるのは、「指標詞」と「指示詞」の用語が同等のものとして扱われうることであろう。ところが、“How to Bridge the Gap between Meaning and Reference” では、

純粋な指標詞 (I, now, here, today) と指示詞 (this, that, he, she) に区別されているのである。結局、「指標詞」と「指示詞」の用語の使われ方にはかなりの相違が見られるのである。そのような用語上の混乱が理解の妨げになることは事実であろうし、それ以上に、同等なものとして扱うべきかどうかの問題、区別するとすれば、どのような基準ですべきかの問題が今後大きく関わってくることになるであろう。ともかく、その問題は今回取り上げないことにして、「指標詞」と「指示詞」を厳密に区別しないで使用していくことにする。なお、言語学では「直示的」(deictic)が使用されるのに対して、哲学では「指標的」(indexical)が使用されるのが一般的である⁹⁾と言われるように、用語上においても、分類方法においても、言語学と哲学とでは異なっていることを付け加えておく。

「指標表現」(indexical expressions)の適用範囲(言い換えれば、「指標詞」あるいは「指示詞」の使用範囲)、つまり指標詞あるいは指示詞を含む言語表現が発話される場面は、基本的には、話し手と指示される対象物と聞き手が面と向かった関係にあり、目の前にある対象物を指で指し示すという動作を伴うものである。例えば、話し手が目の前にある本を指差して、“This is interesting”(「これは、面白い」)と聞き手に言い、“This”の指示物がその本であることが聞き手にははっきりと確認できる場合である。勿論、指差しという動作以外にも、手、頭、目などの体の一部の動きを伴う時もあれば、体の動きを全く伴わずに、別の条件で指示物を確認できる時もある。例えば、目の前に居る聞き手に向かって、話し手が“You look tired”(「君は、疲れているようだ」)と言えば、聞き手は“You”の指示物が自分であることが分かる場合である。つまり、(i)話し手と指示される対象物と聞き手が面と向かった関係に在ること、(ii)指示物を確認する上で必要な動作あるいはその他の条件が伴うこと、(iii)五感(特に、視覚、触覚)によって話し手と聞き手双方が指示物を直接知覚できること、以上の三条件を満たすものが基本的で、単純なケースであると言える。そして、それ以外にも「指標詞」あるいは「指示詞」が使用できるケースがある。(i)については、電話での会話のように、話し手と指示物は面と向かった関係に在るが、聞き手が遠く離れている場合、直接見たり、触れたりできないが、音や臭いで指示物が確認できるように、話し手と聞き手は面と向かった関係に在るが、指示物が遠く離れている場合などがあり、(iii)については、(i)が満たされたものとすれば、聞き手が目隠しされている場合(視覚と触覚で直接知覚できないが、他の人の手助けで指示物が分かる時)などがあり、(i)が満たされていないものとすれば、新聞、本などに書かれている人物、事件、事物について話し手と聞き手が話題にする場合(話題にされる対象物が直接知覚できない為)、テレビ・ビデオに写し出される人物、事件、事物について話し手と聞き手が話題にする場合(映像は直接知覚できるが、その映像の元になっている人物、事件、事物は直接知覚できる範囲を超えている為)などがある。以上のケースは、基本的で、単純なケースを变形させながら派生するという意味で、派生的ケースと呼ぶことができよう。ともかく、基本的で、単純なケースであれ、また派生的ケースであれ、

「指標詞」あるいは「指示詞」が使用される範囲は、日常的な言語使用場面を考えれば明らかのように、実に幅広く、多岐にわたるのであり、従って「指標表現」が適用されるケースも様々であり、複雑でもあるが、それら全てを網羅するのでは勿論なく、「指標詞」あるいは「指示詞」の指示機構を解明していくのが本稿の目的である。なお、指示機構の問題を複雑化させない意味で、ある特定の、単一の対象物を指示する為に使用される「指標詞」あるいは「指示詞」に限定することにする。

3. フレーゲの説明

Fregeの“Thoughts”は、指標表現あるいは指標性(indexicality)に関する彼の考え方を理解する上で拠り所となる論文であり、またFrege批判を通して修正・改善を行い、フレーゲ的考え方そして反フレーゲ的考え方を展開させた哲学者が拠り所とした論文でもある。その拠り所となる論文“Thoughts”は、少なくとも指標表現に関する限りでは、断片的な説明が数箇所与えられているにすぎず、決して十分明確で、納得のいく説明がなされているとは言えるものではない。そのことが原因となって、解釈をめぐる、判断をめぐる、数多くの様々な意見が出されてきたのである。Frege研究者として著名な Dummett⁽¹⁾が認めているように、Fregeは指標表現あるいは指標性に対して余り興味を抱いていないこともあり、適切で、説得力のある説明、首尾一貫した説明を提供していないと言えるが、そのような問題はあるとしても、“Thoughts”において提供される断片的な説明からFregeの基本的な考え方を読み取ることはできるであろうし、指標表現の理論の基礎を成すと同時に、その後の発展の出発点を成すという意味で、正当に評価されるべきものであると言えよう。

“Thoughts”は、その題名が示すように、思想(thought)(簡単に言えば、考え)の概念、そしてそれに伴う意味(sense)の概念が論じられているものである。指標表現の説明は、そのような思想と意味の概念との関係で、断片的に提供されるのである。そこで、Fregeの基本的な考え方を理解する上で重要と思われる箇所は、p. 36, pp. 40~42, p. 53, そして p. 55 であると言えるが、それらを具体的に調べていくことにする。それらの中で、Fregeの言語観、思想の概念、意味の概念(Fregeにとっての用語“sense”は、後で明らかにするように、単に言語的意味だけでなく、それ以上の、あるいはそれ以外のものをも表すので、用語「意味」も広義に使用する)、指標表現の概念などが示されるのである。

(1) The thought, in itself imperceptible by the senses, becomes clothed in the perceptible garb of a sentence, and thereby we are enabled to grasp it. We say a sentence *expresses* a thought. (p. 36)

(それ自体感覚によっては知覚できない思想(考え)が文という知覚可能な服を身に纏うことになり、そのことによって私たちは思想を把握できることになる。従って、文が思想を表現すると言える。)

Frege にとっての思想は、観念(idea)という心の内部に存在する主観的なものでも、また感覚によって知覚可能な外界の物質でもなく、それ自体感覚によって知覚できるものではないが、知覚可能な言語という形に包まれることによって伝達可能になり、その言語を理解することによって把握されるというようなものである。つまり、話し手は自らの考えを文という言語の形で言い表わし、聞き手はその文を理解することによって話し手の考えを把握し、そのことで両者の伝達が成立することになる。それが「文が思想を表現する」ことの意味である。そして、(1)は p. 55 の Frege の言語懐疑的な記述にもつながるのである。というのは、人は自らの考えをあくまでも言語という形を通して表現し、また人はあくまでも言語という形を通して相手の考えを把握するという言語を媒介にする過程には、言語を通してどこまで考えを表現できるのか、またどこまで考えを把握できるのかという疑問が生まれ、言語懐疑的、更には言語不信的になる可能性があるからである。しかし、そのような言語懐疑的な記述の存在によって、Frege が言語の欠陥性の一例として指標表現をみなしていると判断すること⁽¹¹⁾ (また、指標表現の欠陥性を引き起こす原因であるという判断にもつながるであろう)は、多少性急であろう。Frege がそのようにみなしているのかどうかは別にして、言語を媒介にする伝達過程には、単に言語的要素のみならず、多くの非言語的な諸要素が関わっており、それらの総体として伝達が成立するのであり、指標表現はその典型的な例である(言語的要素+非言語的要素)。従って、現実の伝達過程から、直線的に言語懐疑的・言語不信的意見、言語の欠陥性、指標表現の欠陥性などに結び付けて考えるのは疑問であろう。

(2) when we call a sentence true we really mean that its sense is true. And hence the only thing that raises the question of truth at all is the sense of sentences. . . . I mean by 'a thought' something for which the question of truth can raise at all. So I count what is false among thoughts no less than what is true. I can therefore say : thoughts are senses of sentences, without wishing to assert that the sense of every sentence is a thought. (p. 36)

(ある文を真であると言う場合、本当はその文の意味が真であるということを私たちは意味するのはです。従って、真偽の問題を引き起こす唯一のものは文の意味です。・・・私は「思想」(考え)を真偽の問題を引き起こすものとします。従って、思想の内、真であるものと同様に、偽であるものも考慮に入れます。それ故、全ての文の意味が思想であると主張するつもりではないが、思想とは文の意味であると言うことができます。)

(2)で述べられている Frege の思想と意味の説明によると、真偽が問題になるのは文自体ではなく(文法的に正しいかどうかは問題になるが)、あくまでも文の意味であり、また文によって表される思想であり、しかも文の意味と文によって表される思想とは同一であるということになる(文の中には、不完全な文もある為、全ての文の意味を思想と呼ぶことはできないが、少なくとも思想と呼ばれるようなものは必ず文の意味である。そこで、話を簡単にする為、単純に意味

=思想として扱っていくことにする)。別の言い方をすれば、ある文(S1)を真であるとして受け入れ、別の文(S2)を偽であるとして拒絶する場合、S1とS2は異なる意味と異なる思想を表すことになる。というのは、もしS1とS2が同一の意味と同一の思想を表すのであれば、一方を真として受け入れ、他方を偽として拒絶することは矛盾になってしまい、従って一方を真として受け入れ、他方を偽として拒絶するということは、S1とS2が異なる意味と異なる思想を表すことになるからである。しかし、それだけでは不十分である。例えば、“I am a student”（「私は、学生です」）と“He is sleeping on the bench”（「彼は、ベンチで寝ています」）の二つの文は、全く共通点が存在せず、従って異なる意味と異なる思想を表すと言えるが、二つの文とも真として受け入れることもできるし、また二つの文とも偽として拒絶することもできるからである。そこで、(2)の主張が適用できるS1とS2とは、指標詞を含む文に関して言えば、指標詞以外の部分が同一であるような文でなければならなくなる。簡単に言えば、S(i)として表せよう（指標詞(i)を含む文(S)がS(i)で、しかもi以外の部分が同一である。また、S(i)の変形として、指標詞を含まない文をS()と表せる。S(i)は、PerryのS(d)の内、指示詞(d)を指標詞(i)に入れ替えたものである¹²⁾。一例を挙げれば、“My mother is sitting here”（「私の母は、ここに座っています」）と“My mother is sitting there”（「私の母は、そこに座っています」）である。

a criterion of difference for senses : If A understands S and S', and accepts S as true while not accepting S', then S and S' have different senses.¹³⁾

（意味の差異基準：もしある人(A)がある文(S)と別の文(S')を理解し、しかもSを真として受け入れる一方で、S'を受け入れない場合、SとS'は異なる意味を持っていることになる。）

a criterion of difference for thoughts : If S is true and S' is not, S and S' express different thoughts.¹⁴⁾

（思想の差異基準：もしある文(S)が真であり、別の文(S')が真でなければ、SとS'は異なる思想を表現することになる。）

引用したPerryの意味の差異基準と思想の差異基準は、Fregeの意味と思想の概念を端的に表すものと言える（勿論、SとS'は、前述したS1とS2として解釈すべきである）。なお、意味の差異基準は“On Sense and Reference”を、そして思想の差異基準は“Thoughts”を基にして作られたものである。ともかく、(2)について注意すべき点は、二つの文を比較する際、その相違を文自体ではなく、意味と思想を基にする差異基準で判断することであり、文の意味をその文によって表現される思想として捉えている（意味=思想）為に、文の意味と文によって表される思想の間には食違いが生じないこと（意味は異なるが、思想は同一であるとか、逆に意味は同一であるが、思想は異なるという関係にはなく、必ず二つの文は意味が異なれば、思想も異なる）である。

(3) the mere wording . . . does not suffice for the expression of the thought . . . If a time-indication is conveyed by the present tense one must know when the sentence was uttered in order to grasp

the thought correctly. Therefore the time of utterance is part of the expression of the thought.

(p. 40)

(単なる言葉の表現だけでは、思想(考え)を表すのに十分ではない。もし時の表示が現在形によって示される場合、思想を正確に把握する為に、文がいつ発話されたのかを知らなければならない。従って、発話の時は思想の表現の一部である。)

Now is a thought changeable or is it timeless? . . . are there not thoughts which are true today but false in six months time? The thought, for example, that the tree there is covered with green leaves will surely be false in six months' time. No, for it is not the same thought at all. The words 'This tree is covered with green leaves' are not sufficient by themselves to constitute the expression of thought, for the time of utterance is involved as well. Without the time-specification thus given we have not a complete thought, that is we have no thought at all. Only a sentence with the time-specification filled out, a sentence complete in every respect, expresses a thought. But this thought, if it is true, is true not only today or tomorrow but timelessly. (p. 53)

(さて、思想(考え)は可変的なものなのか、それとも不変的なものなのか。今日は真であるが、六ヶ月して偽になる思想はないのか。例えば、そこにある木が青々とした葉におおわれているという思想(考え)は、確かに六ヶ月すれば偽になるであろう。いや、そうはならない。というのは、それは同一の思想ではないからである。表現「この木は青々とした葉におおわれている」は、思想の表現をなすのにそれ自体では十分ではない。というのも、発話の時も同様に関わっているからである。そのような時が明確にされていなければ、完全な思想を持たず、結局思想そのものを持たないことになる。時が明確にされている文のみが、全ての点で完全な文のみが思想を表現することになる。しかも、この思想は、もし真であるとすれば、今日・昨日だけでなく、永遠に真である。)

(3) で示される Frege の思想とは、完全な思想のことであり、全ての点から見て(時、その他の全ての点)完全な文によってのみ表現される思想のことであり、そして文の発話される文脈(context)に応じて変化する文脈依存的で、相対的な真理値(truth-values)ではなく、全ての文脈において、文脈に関係なく、不変的で、絶対的な真理値を有するものことなのである。その意味から言えば、発話で一般的に使用される文(例えば、Frege の "This tree is covered with green leaves")は、全ての点で完全であるとは言えず、不完全な文ということになり、その理由で、完全な思想を表現することができず、結局思想そのものを表現できないことになってしまう。そして、(2) の意味=思想を入れて考えれば、Frege の意味に関しても、上記と同様のことが言えるはずである(例えば、Frege の意味とは、完全な意味のことで、完全な文のみが有することのできる意味のことであり、等々)。しかし、Frege 自身はそのようことを述べてはいない。ただ、(2) の意味=思想を受け入れる限り、そう言えるはずである。

Frege の「全ての点で完全な文」は、いわゆる「不変的な文」(eternal sentence)につながる。不変的な文とは、あらゆる文脈において、文脈の変化に関係なく、文の内容(用語「内容」を、Frege の「思想」(thought), Perry の「情報」(information), Kaplan の「内容」(content), 「命題」(proposition)などを含む曖昧な意味で使用する)が不変的なままでいる文のことである。例えば、“Yukio Murakoshi is standing on the platform of Shinjuku Station at 3:00 on August 1st, 1993” (「村越行雄は、1993年8月1日3時に新宿駅のプラットフォームに立っている」)が不変的な文で、その文が発話される文脈に関係なく、その文の内容は完全で、確定的で、従って不変である。その意味で、もしその文の内容が真であれば、いかなる文脈においてもその真理値は不変で、絶対的である。それに対して、可変的な文(non-eternal sentence), 例えば、“I am standing here now” (「私は、今ここに立っています」)は、その文が発話される文脈に応じて、人物(“I”の指示物)、場所(“here”の指示物)、そして時(“now”の指示物)が変化する為に、その文の内容が文脈の変化に応じて変化し、従って文脈依存的で、可変的で、その為文脈から切り離して見る限り、不完全で、不確定的であるということになる。その意味で、その真理値も文脈依存的で、相対的で、可変的である。そうした不変的な文と可変的な文を比較すれば、本来文脈依存的な指標詞を含めば、文は可変的な文になり、指標詞を完全に排除すれば、文は不変的な文になるということが見えてくる。そこで、日常的に使用されている可変的な文(特別な目的がない限り、日常的に不変的な文を使用することはないであろう)の内容を不変的な文に言い替えることは可能であり、ある特定の、個々の文脈における可変的な文の内容を全て不変的な文で表すことも可能であると信じてしまう傾向が生まれてくるのも自然かもしれない。例えば、文“(I) am standing (here) (now)”に関して言えば、その文が使用される文脈における内容が、()内の指標詞を取り除き、指標詞を使用しない表現に置き換えることによって十分言い表わせると信じるのは自然なのかもしれない(しかし、指標詞を全く使用しない文に置き換えることが可能であるのかどうか、それによって内容が本当に完全で、確定的になるのかどうかは、疑問であるが)。

(3)に関する限りでの Frege の思想は、上記のようなものとして解釈できようが、それが Frege の考えていた思想なのであろうか。その点については、次の(4)で調べることにする。

(4) In all such cases the mere wording . . . is not the complete expression of the thought ; the knowledge of certain conditions accompanying the utterance, which are used as means of expressing the thought, is needed for us to grasp the thought correctly. Pointing the finger, hand gestures, glances may belong here too. (p. 40)

(そうした全ての場合、単なる言葉の表現だけでは、思想(考え)を完全に表現することにはならない。つまり、思想を表現する為の手段として利用される発話時の諸条件の知識が、思想を正確に把握する為に必要になってくる。指差し、手の動作、目の動きがその条件に入るであろう。)

(4)は、一般的に使用される不完全な文(可変的な文)だけで完全な思想を表現することはで

きないが、その文が発話される時に利用される諸条件を付け加えることによって完全な思想として表現できると解釈できよう。簡単に言えば、不完全な文（可変的な文）の思想＋発話時の諸条件（文脈的要素）＝完全な思想の表現となる。聞き手側から見れば、不完全な文によって表される不完全で、不確定的な思想を、発話時の諸条件（指差し、その他の様々な条件によって、いつ、誰が、どこで、何をしているのかが分かる）を知ることによって完全で、確定的なものとして把握することができよう。

(3') 不完全な文（可変的な文）の思想→完全な文（不変的な文）＝完全な思想の表現

（→は置き換え可能性、表現可能性を示す）

(4') 不完全な文（可変的な文）の思想＋発話時の諸条件（文脈的要素）＝完全な思想の表現

(4)はごく簡単に触れられているにすぎないのに対して、(3)は結論的なものとして述べられているので、その意味から言えば、(4)ではなく、(3')がFregeの考えていた思想であると解釈できよう。しかし、Frege自らが(3')を明言している訳ではない。

(3'') 不完全な文（可変的な文）＝不完全な思想の表現（あるいは、思想そのものが存在しない）、
完全な文（不変的な文）＝完全な思想の表現

むしろ、Fregeは(3'')のようなことを述べているにすぎないが、(3'')だけでは不十分である。というのは、不完全な文からFregeの最終目的地である完全な思想へと橋渡しすることがどうしても必要であり、もしその橋渡しがなければ、日常的に使用されている不完全な文を否定し、完全な文のみを認める結果になってしまうからである。そこで、橋渡しをする為に、(3')と(4')のいずれかを選ばなければならないとすれば、Fregeにとっては(4')より(3')の方になるであろう。

(3)と(4)は、もともと思想に関する説明であるが、(2)の意味＝思想を入れて考えれば、意味に関しても同様のことが言えるはずである。つまり、(3')と(4')に意味＝思想を入れて、次のように言えるはずである。

(2-3') 不完全な文（可変的な文）の意味→完全な文（不変的な文）＝完全な意味

(2-4') 不完全な文（可変的な文）の意味＋発話時の諸条件（文脈的要素）＝完全な意味

(2-3')と(2-4')を前掲の例を使用して説明してみることにする。それはまた(3')と(4')の説明でもある。文“I am standing here now”の意味は、その文が発話される個々の文脈において、当然話し手(“I”の指示物)、場所(“here”の指示物)、そして時(“now”の指示物)が異なってくる為、文の意味として見る限り（文脈から切り離して見る限り）、不完全で、不確定的なものと言える。そのような文の不完全で、不確定的な意味は、ある特定の文脈において、誰がその文を発話したのか、場所はどこなのか、時はいつなのか特定されるので、それらを指標詞と取り替えることによってできる文“Yukio Murakoshi is standing on the platform of Shinjuku Station at 3:00 on August 1st, 1993”によって言い表わせることになる。そして、文の意味は、完全で、確定的なものになる。以上の(2-3')に対して、(2-4')はどうであろうか。前述の基本的で、単純なケースを

考えれば、分かりやすいであろう（勿論、より複雑なケースもあるが、分かり易くする為に、基本的で、単純なケースを使用する）。話し手が文“I am standing here now”を聞き手に発話する時、聞き手は話し手の目の前にいて、同じ場所と同じ時を共有している訳で、たとえその文の意味がそれ自体として不完全で、不確定的であっても、聞き手にとっては“I”が誰を指しているのか、“here”がどこを指しているのか、そして“now”がいつを指しているのかは当然分かっているので、それらの知識を付け加えることによって、その文の不完全で、不確定的な意味が完全で、確定的なものになるのである。そのことによって聞き手は話し手の発話する文の意味を正確に理解するのである。そのように見てくると、(2-3')と(2-4')の相違は、単に文脈的要素を文の中に組み入れて（文脈的要素と指標詞の取り替え）完全な文にするのか、それとも組み入れないままにするのかの違いにすぎず、大差はないと思われるかもしれない。しかし、そう単純ではない。例えば、文“I want now”を発話する時、話し手は決して「村越行雄は、1993年9月15日12時に望みます」ではなく、「今、欲しい」を言いたい訳で、その文を完全な文に置き換えても、その意味と思想が完全で、確定的になることはなく、むしろ失われてしまうであろう。

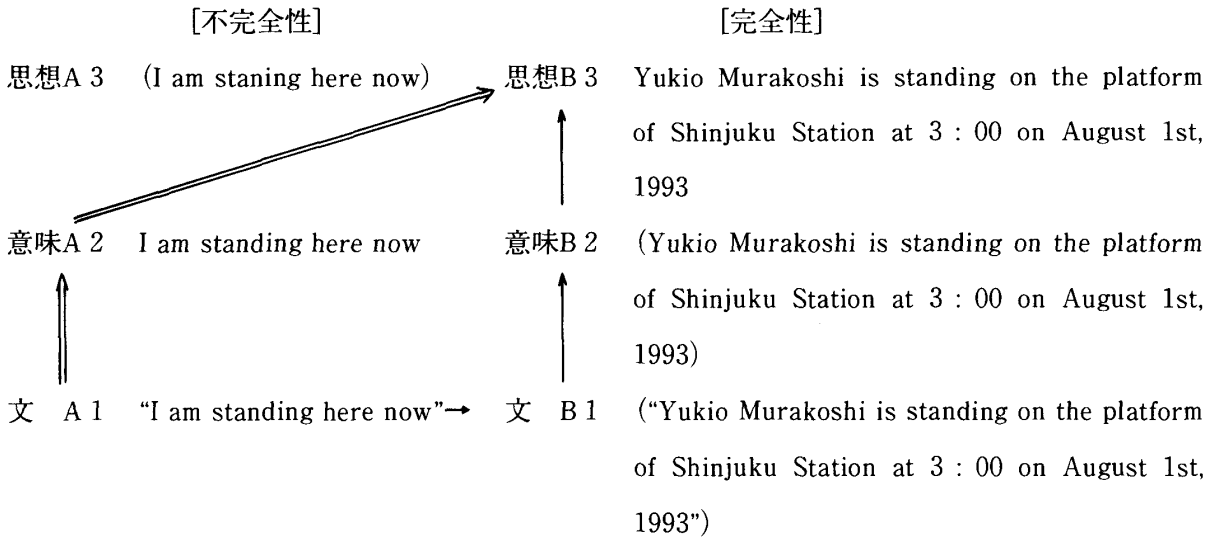
Frege自身が(2-3')と(2-4')を明言している訳ではないが、Perry⁽¹⁵⁾、Dummett⁽¹⁶⁾などが認めるように、Fregeの主張から「完全な意味」という概念を読み取ることは可能であるし、そこから(2-3')と(2-4')を推論することも可能であろう(PerryとDummettは、「完全な意味」を指標詞の意味から捉えているが、それを文の意味に当てはめて言えば、Perryが(2-3')を受け入れるのに対して、Dummettは(2-3')でもなく、また(2-4')でもなく、曖昧であるが、両者の中間的なものを想定しているのかもしれない)。もしそうであるとすれば、(2-3')と(2-4')のどちらがFregeの意味に近いものと解釈できようか。そこで、意味だけが指示を決定し、意味が指示を独自に決定するというFregeの考え方が重要になってくる。というのは、指示あるいは指示物が意味のみによって決定されるということは、発話時の諸条件が関係ないものになってしまうからである（少なくとも、直接関係ないものになってしまう）。その意味から、Fregeの意味が(2-3')で、また同様の理由で、Fregeの思想が(3')であると解釈できよう。

(1)から(4)へと検討してきたが、Fregeは一体用語「意味」(sense)と「思想(考え)」(thought)をどのような意味で使用しているのかという疑問が生まれてくるであろう。事実、その解釈をめぐる様々な意見が出され、批判的になったところである。その原因は、むしろFrege自身の曖昧さ(特に、“Thoughts”)にあると思われる。そこで、そのような曖昧さの理由説明として興味深いのが、Fregeの意味の概念に対するDummettの解釈⁽¹⁷⁾である。Dummettによれば、Fregeが意味について語ったのは、ほとんどが指標性以外のところで、指標性を除けば、意味＝言語的意味と捉えて構わないが、ただFregeが指標性について語った時、意味＝言語的意味と意味＝思想という二つの異なる要素が意味の概念に入り込んでしまっているということになる。指標詞以外のところで、果たしてFregeが意味＝言語的意味と捉えていたかどうかは確か

指標詞と指示詞

はないが、少なくとも“Thoughts”を見る限り、意味＝思想と意味＝言語的意味が入り込んでいる言えよう。その点を調べてみることにする。

表1：意味と思想



話し手が文A 1を発話する場合、その文の言語的意味は意味A 2であるが、その発話がなされる特定の文脈（話し手が村越行雄で、場所が新宿駅のプラットフォームで、時が1993年8月1日3時である文脈）においては、話し手が文A 1によって表現する考え（その特定の文脈で、文A 1が表す話し手の考え）は思想B 3になる。もし「意味」を言語的意味として捉えるならば（意味＝言語的意味、言語的意味≠思想、従って意味≠思想）、話はこれで終わるのである。つまり、文A 1が持つ言語的意味は意味A 2であるが、その文が特定の文脈で発話される場合、その文によって表される話し手の考えは、その文自体の言語的意味ではなく、その発話と関連のある文脈的要素を組み入れる思想B 3でなければならず、結局意味A 2≠思想B 3となり、説明は終わるのである。しかし、もし「意味」を思想として捉えるならば、上記の()が必要になってくる。意味＝思想を前提にする限り、意味A 2＝思想A 3は成立せず(意味A 2は文A 1の言語的意味としては真であるが、思想A 3は文A 1によって表される思想としては偽である為)、従って思想B 3＝意味B 2のみが成立しうることになる。そうであるとすれば、意味B 2は文A 1の言語的意味にはなりえない為、意味B 2≠意味A 2になるが、文A 1の言語的意味としての意味A 2を否定する訳にはいかない。そこで、更に意味＝言語的意味を前提にすることで、意味B 2を文B 1の言語的意味とし、意味B 2＝文B 1の言語的意味と意味A 2＝文A 1の言語的意味にして、意味B 2と意味A 2を共に存続させることができることになる。そのような意味＝思想と意味＝言語的意味の前提という操作で、上記のもの全てを存続させることはできるが、それだけでは不十分である。そこに「完全性」と「不完全性」という概念を導入することで、全ての関係が説明できることになる。その説明とは、以下のようなものである。

ある特定の文脈において、話し手が文A 1を発話する時、指標詞を含んでいる為、文脈の変化

に応じて意味A 2も変化してしまうので、あくまでも文A 1によって表現される思想という観点から見れば、意味A 2は不完全であり（意味＝思想である為、文A 1の言語的意味としては真であっても、文A 1によって本来表現されるべき思想B 3としては不完全である為）、その不完全な意味を持つ文A 1も不完全なものとなる（意味＝言語的意味である為、本来文A 1によって表現されるべき思想B 3を直接表しきれない為）。そして、文A 1がそのまま直接表現する思想A 3は、本来の思想であるべき思想B 3から見れば、欠陥があり、不完全な思想としか言えず、むしろ思想そのものとして成り立たないと言える。そこで、話し手、場所、そして時が特定されている文脈における思想としては、思想A 3が成り立たない以上、そうした文脈的要素を考慮に入れて、不完全な意味A 2を確定的で、完全な思想B 3（意味＝思想の為）にしなければならないが、具体的な手順は、まず最初に文A 1の指標詞を特定の指示物と入れ替えて文B 1を作り、次に文B 1＝文B 1の言語的意味B 2である為、意味B 2を手に入れ、更に意味B 2＝思想B 3である為、思想B 3に辿り着くというものである。つまり、文A 1→意味A 2→思想B 3という過程は、具体的には文A 1→文B 1→意味B 2→思想B 3という手順に基づくのである。以上のように、意味＝言語的意味と意味＝思想という前提、そして「完全性」と「不完全性」という概念を利用することで、上記の表1の全ての関係が説明されるのである。そして、前述の(3')と(2-3')の背後には、表1のような考えがあると言えよう。

そうであれば、例えば、(1)と(2)で引用した Frege の言葉は、「文（完全な文）が思想（完全な思想）を表現すると言える」、「全ての文（不完全な文＋完全な文）の意味（不完全な意味＋完全な意味）が思想（完全な思想）であると主張するつもりではないが、思想（完全な思想）とは文（完全な文）の意味（完全な意味）であると言うことができよう」に書き替えることができるのである。そして、“Thoughts”を曖昧で、理解しにくくさせている原因の一つは、「文」、「意味」、そして「思想」という用語を「完全な」であるのか、「不完全な」であるのか、また意味＝言語的意味なのか、意味＝思想なのかを明記しないで使用していることであると言えよう。また、(3)の Frege の例文 “This tree is covered with green leaves” も表1の文A 1の位置に入る。というのは、場所、時などが明らかな場合、それらに関する指標詞を除くことが日常的によく行われており、そのような文は、文A 1 “I am standing here now” と同様に、不完全な文とみなすことができるからである。

上記の説明が Frege の描いていた意味と思想の概念であるとするれば、意味の概念の曖昧さ（意味＝言語的意味と意味＝思想の二要素を含む意味の概念）によって、いかに複雑に、いかに難解にされているのかが理解できよう。文A 1→意味A 2→思想B 3という過程は、意味の概念の曖昧さの為に、(3')と(2-3')を想定し、しかも文A 1→文B 1→意味B 2→思想B 3という手順として捉えられることになってしまったが、もし意味を単に言語的意味にすぎないとすれば（意味＝言語的意味、言語的意味≠思想、従って意味≠思想）、少なくとも Frege よりも簡素化される

であろうし、また「完全性」と「不完全性」を使用しないで済む為に、前述の(4')と(2-4')を組み合わせて、文の意味+発話時の諸条件(文脈的要素)=思想(文A 1の意味A 2+発話時の諸条件(文脈的要素)=思想B 3)として捉えられることになるであろう。しかし、Fregeの意味の概念は、更に別の曖昧さを持っている。その点については、次で述べることにする

(5) If someone wants to say today what he expressed yesterday using the word 'today', he will replace this word with 'yesterday'. Although the thought is the same, its verbal expression must be different in order that the change of sense which would otherwise be effected by the differing times of utterance may be cancelled out. It is the same with words like 'here' and 'there'. (p. 40)

(ある人が「今日」という語を使用して昨日表現したことを今日言おうとする場合、その人はその語を「昨日」と取り替えることになる。その思想(考え)は同一であるが、発話の時間が異なることによって生じてしまう意味の変化を起こさないようにする為に、その言語表現は異なるものでなければならない。「ここに」や「そこに」という語も同じである。)

(5)については、具体例を挙げた方が理解しやすいであろう。

(a) "It is raining today" (「今日は、雨が降っている」)

(b) "It was raining yesterday" (「昨日は、雨が降っていた」)

話し手が8月10日に(a)を発話したとする。翌日の8月11日に再び同じ(a)を発話すると、最初の"today"は8月10日を示しているが、二番目は8月11日を示す為、異なる思想を表現していることになる。そこで、"today"の代わりに、"yesterday"を入れて(b)を発話すれば、(a)と(b)は同一の思想を表現することになる。つまり、時の指標詞は、発話の時間が異なれば、同じ言語表現を使う限り、意味の変化を引き起こすことになるので、そうした変化を起こさせない為には、異なる言語表現が必要となり、そのことで同一の思想が保たれることになる。

(5)におけるFregeの主張が、もし"today"と"yesterday"が同一の指示物(8月10日)を示すという理由で、(a)と(b)が同一の意味を持ち、同一の思想を表現するというのであれば、Fregeの"On Sense and Reference"における有名な例¹⁸⁾はどうなるのであろうか。そこでは、次のように述べている。文"The morning star is a body illuminated by the Sun"(「明けの明星は、太陽によって照らされる物体である」)と文"The evening star is a body illuminated by the Sun"(「宵の明星は、太陽によって照らされる物体である」)に関して、「明けの明星」と「宵の明星」は同一の指示物(金星)を示すが、それを知らない者がどちらか一方の文の思想を真として受け入れ、別の文の思想を偽として拒絶することは十分ありえることで、従って指示物が同一でも、「明けの明星」と「宵の明星」の意味が異なる為、二つの文の意味も異なり、二つの文によって表現される思想も異なることになる。結局、一方では、同一の指示物である為、異なる二つの文は同一の意味を持ち、同一の思想を表現するとし、他方では、同一の指示物であるが、異なる二つの文は異なる意味を持ち、異なる思想を表現するというようになってしまう

(a)と(b)の場合も同様に、日時を勘違いしたり、天候を記憶違いしたりして、一方の思想を真として受け入れ、他方の思想を偽として拒絶する者は十分考えられる)。そのような食違いをどのように説明できるのであろうか。一つの可能性として、(5)は指標詞に関するものであるのに対して、明けの明星・宵の明星の例はそれ以外のものに関するもので、その違いによる説明が考えられる。しかし、その違いが何であるのかについて解明するのは、難しく、また問題もあるであろう。次の可能性は、Fregeの意味の概念が持つ別の側面である。表示方法(the mode of presentation)がそれで、Fregeにとっては意味=思想に関わるものである(それに対して、Wettsteinによれば¹⁹⁾、Perryは意味=言語的意味から説明している)。表示方法とは、指示物をどのように表して示すかの方法(指示物をどのように思い描き、それを言葉でどのように表し示すかのやり方)であるが、表示方法が同一であれば、意味が同一であり、表示方法が異なれば、意味が異なることになる。

表示方法を利用すれば、食違いは解消するであろうか。明けの明星・宵の明星の例の場合、同一の金星ではあるが、日の出前の空に輝く星として金星を思い描くからこそ、金星を「宵の明星」ではなく、「明けの明星」と表示し、また日没後の空に輝く星として金星を思い描くからこそ、「明けの明星」ではなく、「宵の明星」と表示する訳で、表示方法が異なり、従って意味も異なる為、前掲の二つの文は異なる意味を持ち、異なる思想を表現すると言える(意味=思想が前提)。(5)の場合、多少話が込み入る。話し手と聞き手の二人がいて、8月10日に話し手が(a)と言い、翌日の8月11日に8月10日が雨であったことを聞き手が言う時、聞き手には8月10日を表示する為の表現として(「(), 雨が降っていた」の()内に入る同一指示物を表す表現として)、例えば、「昨日は」、「8月10日は」、「試験最終日は」、「結婚式当日は」、「足を折った時は」などがある。そのような中で、聞き手が雨の降った8月10日を思い描き、ある表現(例えば、「昨日は」)で表示する時の表示方法は、話し手が「今日は」で表示する時の表示方法とは異なっているであろう。そうであるとすれば、(a)と(b)は、表示方法が異なる為、指示物が同一であっても、異なる意味を持ち、異なる思想を表現することになってしまう。次は、(a)と(b)を話し手と聞き手のそれぞれが発話するのではなく、両方とも話し手一人が聞き手に発話する場合を調べてみよう。もし、(a)を発話する時、話し手が雨の降っている8月10日を思い描いて、「今日は」で表示する時の表示方法、そして(b)を発話する時、同じ雨の降った8月10日を思い描いて、「昨日は」で表示する時の表示方法、それらが同一であれば、食違いは解消することになるであろう。そして、Fregeにしても、表示方法が同一であると考えたからこそ、(5)を主張したと解釈できよう。そこで、Evansの意見を見てみることにする。

(5)で引用した最初の文章に対して、二人の人が同一の対象物を指示し、その対象物について同一のことを述べた場合、その二人は同一の思想を表現したことになるとFregeは結論付けていると解説する哲学者が多くいるが(例えば、Kaplan, Dummettなど)、彼らはFregeの文章を正

しく解釈していないと批判し、指示物が同一であるという理由だけで、同一の思想が表現されるという考え方から言えば、「今日は」と同一の指示物を示す表現であれば何でもよく、それら全てが同一の思想の表現ということになってしまうとEvans⁽²⁰⁾は言う。つまり、S(i)の内、()の表現がいかなる指標詞(i)であれ、また指標詞以外のいかなる表現であれ、指示物が同一で、Sが同一の文である限り、S(i)は必ず同一の思想を表現することになるとする解釈に問題があるというのがEvansの主張であろう。Evansの批判を受けてDummett⁽²¹⁾は、例えば、ある日に“*It is cold today*”(「今日は、寒い」)と言い、翌日“*It was cold yesterday*”(「昨日は、寒かった」)と言うように、またSmithがJonesに“*I am cold*”(「私は寒い」)と言い、JonesがSmithに“*You are cold*”(「あなたは寒い」)と言うように、相関関係にある指標詞を含む発話のことを述べているのにすぎないと反論する。しかし、Dummettの反論のように、S(i)は、()の表現が同一指示物を示す指標詞、あくまでも相関関係にある交換可能な指標詞であれば、同一の思想を表現すると言えるのかもしれないが、Evansの主張したいことは、Fregeの文章を表示方法の観点から、しかも二人ではなく、一人の人間の発話という観点から解釈する必要があるということであろう。というのは、前述のように、単に指示物の同一性の観点からのみ解釈すれば、矛盾が生まれてしまうからであり、また表示方法の同一性について考えると、異なる人間が同一の指示物に対して全く同じように思い描き、全く同じように表示示すことができるのかどうかは疑問であり、可能性としては一人の人間の発話にあると思われるからである。ともかく、Evansの提案する解決策とは、「表示方法」を「ある時点で、ある対象物を捕まえること」(having hold of an object at t)として静的に捉えるのではなく、「ある時点から次の時点へと、ある対象物の跡を追い求めること」(keeping track of an object from t to t')として動的に捉えることである。(a)と(b)を例として使用すれば、話し手が8月10日に雨の降っている8月10日を思い描くのと同一方法で、8月11日に雨の降った8月10日を思い描くのを可能にさせているのは、話し手が雨の降っている8月10日を8月10日から8月11日へと(中断なく)追っていることで、そのことで(a)と(b)が同一の思想を表現することになり、もし途中で、その指示物を見失えば(日時を勘違いしたり、天候を記憶違いしたりして)、(a)と(b)は異なる思想を表現することになるということである。但し、そのようなEvansの指示物追跡という考えは、人が代わってできるものではなく、当然同一人間のみにも可能である以上、限定された範囲にしか適用できないであろう。

結局、(5)と明けの明星・宵の明星の例の食違いを解消する方法としては、指標詞のみに限定して、相関関係にある指標詞の交換によって同一思想が存続されるとするDummettのやり方(today-yesterday, I-you, here-there)も可能であるし、また時間推移の中での指示物追跡によって同一思想が存続されるとするEvansのやり方も可能であるが、あくまでも(5)に対するFrege解釈について言えば、Evansの方が妥当性があるように思われる。しかし、Frege解釈としては妥当性があるとしても、それは別にして、Evansのやり方には弱点がある(Dummettにもあるが)。

時間推移の中での指示物追跡という考えは、同一人間のみ可能であるという制限と同様に、指標詞のみ可能であるという制限（明けの明星・宵の明星の例で、同一人間が前掲の二つの文を発話するとしても、時間の経過の中で、金星を見失えば、表示方法が異なることになる為、異なる思想を表現することになるが、たとえ金星を中断なく追いつけられるとしても、表示方法が同一であるとは言えず、従って異なる思想を表現することになるので、指標詞には可能であっても、固有名と確定記述には無理であろう）も持つことになる。そのような制限の為に、特に前者の制限について言えば、同一人間以外の場合、同一の指示物を示す表現（後者の制限を認めれば、指標詞のみとなる）を含む文は、異なる人間が発話する時、表示方法が必ず異なってしまうので、絶対的に同一の思想を表現することができず、必ず全てが異なる思想を表現することになってしまうのである。

以上のように、Frege 解釈には意味を表示方法として捉えることが必要になるが、そうすると Frege の意味の概念には意味＝思想、意味＝言語的意味、意味＝表示方法などが含まれていることになる。そして、Dummett の指摘²²⁾のように、もし Frege 自身がそのことに気が付いていないとしたら尚更であるが、意味の概念に含まれる異なる諸要素が Frege の文章そして主張を曖昧にさせているのである。表示方法については、次の(6)で再び扱うことにする。なお、(4)で述べたように、Frege の「思想」と「意味」に関する用法は、曖昧で、混乱と誤解を引き起こすものと言えるが、(5)においてもそうであったが、必要がない限り、簡単に「思想」、「意味」、そして「文」の用語を使用することにする。その理由は、Frege 自身がはっきりとした用語の使い分けをしていないこと、話を複雑にして理解しにくくさせないことなどである。

(6) The same utterance containing the 'I' in the mouths of different men will express different thoughts, of which some may be true, others false. (pp. 40-41)

（異なる人が口にする語「私」を含む同一の発話は、異なる思想（考え）を表現する。そして、その内のあるものは真であり、あるものは偽であったりする。）

そして、指標詞「I」に関わる問題が扱われるのであるが、その後の長い引用(pp. 40-41)は省略し、要約を以下にする。

状況：Dr Gustav Laubenが文1 “I was wounded”（「私は、けがをした」）を言い、それを聞いた Leo Peter が数日後文2 “Dr Gustav Lauben was wounded”（「Dr Gustav Lauben は、けがをした」）を言う。そして、Dr Lauben が発話をした時に同席していた Rudolph Lingens が、Leo Peter が文2を言うのを聞く。

ケース1：Leo Peter と Rudolph Lingens が共に固有名 “Dr Gustav Lauben” によって the doctor who is the only doctor living in a house known to both of them（二人の知っている家に住んでいる唯一の医者であるその医者）を意味するのであれば、二人は共に文2を同じ方法で理解する。従って、二人は共に文2によって同一の思想を思い描くことになる。

ケース 2 : Rudolph Lingens が Dr Lauben を個人的に知らず、文 1 を言ったのが Dr Lauben であることを知らない場合、Leo Peter が表現する思想は、Dr Lauben が言い表わす思想とは同一ではない。

ケース 3 : Herbert Garner は、Dr Gustav Lauben was born on 13 September 1875 in N. N. (Dr Gustav Lauben は、N. N. で 1875 年 9 月 13 日に生まれた) を知っており、そしてそのことは他の誰にも当てはまらないことである。しかし、Dr Lauben が現在どこに住んでいるかは知らず、またその他のことも知らない。それに対して、Leo Peter は、どこで Dr Gustav Lauben が生まれたのかは知らないが、現在どこに住んでいるかは知っている。その場合、Leo Peter が文 2 で表現しようとする思想と同一の思想を Herbert Garner が思い描くことはない。

ケース 4 : Leo Peter は固有名 “Dr Lauben” を使用するのに対して、Herbert Garner は固有名 “Gustav Lauben” を使用するとする。そして、Herbert Garner が文 “Dr Lauben was wounded” の意味を真と受け取るが、間違えた情報の為、文 “Gustav Lauben was wounded” の意味を偽と受け取ってしまうことは可能である。その場合、それら二つの思想は異なる。

(6)における Frege の最初の主張 (英文引用部分) は、同一の指標詞を含む同一文は、異なる文脈で、異なる人によって発話される場合、その指標詞の指示物が異なる為に、異なる思想を表現することになり、従って真として受け入れることもあれば、偽として拒絶することもあるということである。例えば、文 “I am reading the book” (「私は、その本を読んでいます」) は、個々の異なる文脈において、異なる人によって発話されれば、当然指標詞 “I” (「私」) の指示物が文脈の変化に応じて異なってくる為、異なる意味を持つことになり、異なる思想を表現することになる。

第二番目の Frege の主張 (要約部分) は、意味=表示方法に対する Frege の捉え方を表している。その点を調べることにする。

文 1 : “I was wounded”

文 2 : “Dr Gustav Lauben was wounded”

指標詞 “I” と固有名 “Dr Gustav Lauben” は、共に同一人物 Dr Gustav Lauben を指示している。果たして、文 1 と文 2 は、同一の思想を表現するのであろうか、それとも異なる思想を表現するのであろうか。その判断は、Frege に従えば、指示物の同一性ではなく、固有名 “Dr Gustav Lauben” の意味の捉え方を基準にして行われることになる。具体的に言えば、表示方法である。つまり、表示する側から見れば、その人物をどのように思い描いて、その固有名を使用するのか、また表示される側から見れば、その固有名によってその人物をどのように思い描いているのかということを経験的に判断されるのである。そして、Frege は文 2 を中心に、しかも固有名を中心に検討を加えるのであるが、それが文 1 とどのように関わるのかが必ずしも明確とは言えず、そのことが全体的に不明瞭にさせている原因にもなっていると思われる。

ケース1では、Rudolph Lingens と Leo Peter が共に固有名 “Dr Gustav Lauben” の意味を the doctor who is the only doctor living in a house known to both of them と捉えているならば、二人は共に文2によって同一の思想を思い描いていることになる。Frege は言う。そうであるとすれば、文2を発話する時に Leo Peter が思い描く思想、そして文2を聞いて Rudolph Lingens が思い描く思想は、共に文3の思想ということになる。従って、二人が共に文2によって表現される思想を文3の思想と考える限りでは、同一の思想となる。そして、文2と文3を比較すれば明らかのように、固有名 “Dr Gustav Lauben” が確定記述（固有名を含むが）“the doctor who is the only doctor living in a house known to Rudolph Lingens and Leo Peter” (D1) に替わっており、それが二人の表示方法の同一性を示すことになる。というのは、二人が共に人物 Dr Gustav Lauben を D1 として思い描いていることを表すからである。

文3：“The doctor who is the only doctor living in a house known to Rudolph Lingens and Leo Peter was wounded”（「Rudolph Lingens と Leo Peter の知っている家に住んでいる唯一の医者であるその医者は、けがをした」）

ケース2では、Dr Gustav Lauben が文1を発話した場には同席し、文1を耳にしたが、誰が発話したのかは分からず、また Dr Gustav Lauben という人物についても知らない Rudolph Lingens が、数日後 Leo Peter から文2を聞いた場合、文1によって表現される思想と文2によって表現される思想は同一でないというのが Frege の主張であろう。そうであれば、指標詞 “I” と固有名 “Dr Gustav Lauben” の指示物がたとえ同一であっても、文1と文2を耳にする聞き手がその指示物の同一性を知らなければ、それらの文によって表現される思想が同一でなくなってしまう。しかし、ケース2の場合、指標詞 “I” が誰のことを示しているのか、固有名 “Dr Gustav Lauben” が誰のことを示しているのか、聞き手には全く見当がつかないのであるから、思想が同一であるのかどうか以前の問題であろう。

ケース3では、Herbert Garner が固有名 “Dr Gustav Lauben” の意味を Dr Gustav Lauben was born on 13 September 1875 in N. N. と捉えるのに対して、Leo Peter はその固有名の意味を the doctor who is the only doctor living in a house known to Leo Peter と捉える場合、二人は文2によって異なる思想を思い描くことになる。Frege は言う。そうであれば、Leo Peter が文2を発話する時に思い描く思想が文3の思想になるが、Herbert Garner が文2を聞いて思い描く思想が文4の思想になる為、同一の思想ではないことになり、結局、ケース1とは反対に、同一の固有名を異なる意味で捉える限り、たとえ同一の指示物であっても、思い描く思想は異なるものになってしまう。そのことは、固有名 “Dr Gustav Lauben” が一方では確定記述 “the doctor who is the only doctor living in a house known to Leo Peter”（先の D1 から Rudolph Lingens が省かれているが、D1 にする）に替わり、他方では確定記述 “the man who was born on 13 September 1875 in N. N.” (D2) に替わるという具合に、表示方法の相違によって示される。

文 4 : “The man who was born on 13 September 1875 in N. N. was wounded” (「N. N. で1875年9月13日に生まれた人は、けがをした」)

ケース 4 では、Leo Peter が固有名 “Dr Lauben” を使用するのに対して、Herbert Garner が固有名 “Gustav Lauben” を使用する場合、Herbert Garner が文 5 の意味を真として受け入れ、文 6 の意味を偽として拒絶することはありうるので、文 5 によって表現される思想と文 6 によって表現される思想は異なると Frege は言う。そうであれば、たとえ指示物が同一であっても、固有名 “Dr Lauben” と固有名 “Gustav Lauben” が同一の指示物を示していることを知らない聞き手は、それらの固有名によって別々の人物を思い描くことになり、従って異なる思想を思い描くことになってしまう。結局、指示物の同一性を知らなければ、固有名 “Dr Gustav Lauben” が固有名 “Dr Lauben” に替わったり、また固有名 “Gustav Lauben” に替わったりしただけで、表示方法が異なる為に、思想は同一ではないことになる。

文 5 : “Dr Lauben was wounded” (「Dr Lauben は、けがをした」)

文 6 : “Gustav Lauben was wounded” (「Gustav Lauben は、けがをした」)

以上の説明で明らかなように、ケース 1・ケース 3 とケース 2・ケース 4 を区別して検討することができよう。前者に関して言えば、固有名によって指示される人物が同一であっても、しかも固有名によって指示される人物が誰であるのか分かっていても、話し手側から見れば、その人物をどのように思い描いてその固有名を使用するのかということ、聞き手側から見れば、その固有名によってその人物をどのように思い描くのかということ（一言で言えば、表示方法）を基準にして、もし表示方法が同一であれば（固有名の意味が同じ方法で捉えられていれば）、表現される思想が同一になり（ケース 1）、もし表示方法が異なれば（固有名の意味が異なる方法で捉えられていれば）、表現される思想が異なるものになる（ケース 3）ということである。そこで Frege の特徴は、固有名の意味が表示方法として捉えられていることであり、更に指示物の持つ性質の記述（確定記述）として捉えられていることである。例えば、文 2 → 文 3・文 4 である。そこで、意味 = 表示方法 = 指示物の記述が固有名のみに限定されるのか、それとも指標詞にも拡大されるのが問題となる。

固有名 “Dr Gustav Lauben” が D1 あるいは D2 を意味するものとして捉えられているからこそ、文 2 によって表現される思想が、ある文脈では文 3 の思想であったり、またある文脈では文 4 の思想であったりする訳で、そこには Dr Gustav Lauben is D (D1, D2, ...) (Dr Gustav Lauben は、D (D1, D2, ...) である) に基づいて、文 2 の “Dr Gustav Lauben” の部分が D (D1, D2, ...) に置き換えられ、その結果文 2 が文 3 あるいは文 4 に言い換えられるという考えがあると言える。そして、D (D1, D2, ...) は、人物 Dr Gustav Lauben をどのように思い描き、その人物が有する性質（広義に解釈して、住所、誕生日、その他のその人物に属するもの全て）をどのように記述するかを表すもので、従って単に固有名の意味 = 表示方法のみならず、固有名の意味 = 指示物の記

述（確定記述）が存在することになる。それが(6)における Frege の主張であるとして、そのような固有名に関するものが同様に指標詞にも言えるのであろうか。Frege の真意がどこにあるのかは必ずしも明確ではないが、Perry⁽²³⁾が指標詞も同様に扱えると言うのに対して、Dummett⁽²⁴⁾が Frege には意味＝確定記述という考え方はない（指標詞のみならず、固有名をも含む全ての場合、意味が確定記述によって表せるという考え方は Frege にはない）と言うように、様々な解釈が出されているのである。

あくまでも(6)における Frege 解釈に限定すれば、文1と文2が表現する思想が同一であるのかどうかを検討するのが(6)の主題であり、しかも Dr Gustav Lauben が文1によって表現する思想と Leo Peter が文2によって表現する思想が同一である為には、第三番目の人物 Rudolph Lingens は両者が同一のことを話していることを知らなければならないとして例を挙げている以上、第三番目の人物の立場から、文1によって表現される思想と文2によって表現される思想の同一性・差異性が述べられていると解釈するのが自然であろう。但し、Frege は分析対象を文2、特に固有名“Dr Gustav Lauben”に移し、むしろその固有名の意味が様々な捉えられること、その指示物が様々な人によって思い描かれること、それによって思想が様々な思い描かれることなどが前面に出され、文1、特に指標詞“I”との関係が後退しているような印象を受けるのは事実であろう。例えば、文1と文2が同一の思想を表現していることを Frege は否定もしなければ、肯定もしていないと言う Dummett⁽²⁵⁾がその例と言えよう。しかし、たとえそうであるとしても、Frege 自身の文章の流れから判断すれば、やはり(6)において文1と文2によって表現される思想の同一性・差異性が説明されていると解釈するのが自然であろうし、ただ幾つかの例を挙げて、同一の場合もあれば、違う場合もあり、決して単純に同一性あるいは差異性を主張することはできないということが明らかにされていると解釈されるべきであろう。そのように解釈することが可能であるならば、ケース1は、第三番目の人物 Rudolph Lingens の立場から見て、文1によって Dr Gustav Lauben が表現する思想と文2によって Leo Peter が表現する思想が同一になる例であると Frege は考えていたと解釈できよう。もしそうであれば、文1と文2によって表現される思想を共に文3という形で Rudolph Lingens が捉えるからこそ、同一の思想であると判断でき、従って文1の指標詞“I”と文2の固有名“Dr Gustav Lauben”が共に D1に置き換えられることによって文3ができ、そこに同一性が生まれることになると言え、そこから指標詞“I”の意味は、固有名“Dr Gustav Lauben”の意味と同様に、D1として捉えられるという考えに結び付くことになるのではなかろうか。そして、ケース2では、第三番目の人物 Rudolph Lingens の立場から見て、文1を誰が発話したのか、Dr Gustav Lauben が誰なのかについて全く見当がつかないので、文1の指標詞“I”と文2の固有名“Dr Gustav Lauben”のそれぞれの意味を D(D1, D2, …) の内のどの D として捉えていいのか見当がつかず、結局思想の同一性の判断ができないと言えよう。更に、ケース3では（Herbert Garner に Rudolph Lingens を入れ替えて考えれば）、第三

番目の人物 Rudolph Lingens の立場から見れば、文 1 の指標詞 “I” と文 2 の固有名 “Dr Gustav Lauben” のそれぞれの意味を D2 と D1 として捉えるからこそ、思想の差異性の例とみなされると言えるのではなかろうか。ともかく、以上の解釈がもし可能であれば、固有名だけでなく、指標詞一般にも意味＝表示方法＝指示物の記述は拡大できることになるであろう。ところが、(7) で検討するように、(6)とは異なる解釈が可能な指標詞 “I” に関する主張が Frege に見られるのである。

ケース 2 とケース 4 に関して言えば、指標詞と固有名によって指示される人物がたとえ同一であっても、その人物が誰であるのかが分からなければ、その同一性に気が付かないことになり、結局表現される思想は同一でなくなるということであるが、特にケース 2 のように、誰が発話したのか分からず、また指示物が何であるのかも分からなければ、発話される文の言語的意味は理解できても、思想の同一性あるいは差異性を判断することはできないであろう。むしろ、興味深いのは、ケース 4 を指示物の同一性を知らない場合としてではなく、その同一性を知ってる場合として見ることである。というのは、意味＝指示物の記述（確定記述）を特に問題にせず、表示方法（意味＝表示方法）に対する Frege 的捉え方の特徴が顕著に示されると思われるからである。例えば、話し手側から見れば、ある人物をある特定の方法で思い描くからこそ、正式の姓名、名字、愛称、芸名、役職名などの様々な名前でお呼ばれであり、聞き手側から見れば、指示される人物が同一であることを十分知っていても、それぞれの異なる名前を聞くことで、その人物をそれぞれ異なる特定の方法で思い描くことになるのである。そして、そのことが文の意味を異なるものにさせ、文によって表現される思想を異なるものにさせるのである。そのように考えると、表示方法は固有名においてその特徴を顕著に表すが、I, you, here, there, today, yesterday といった指標詞については必ずしもそうは言えないのであろうし、そのことが指標詞の説明の難しさを生み出しているのであろう。少なくとも、意味＝思想と合わせて意味＝表示方法と捉える限りにおいては、Frege がそれに当てはまるであろう。

(7) every one is presented to himself in a special and primitive way in which he is presented to no one else. So, when Dr Lauben has the thought that he was wounded, he will probably be basing it on this primitive way in which he is presented to himself. And only Dr Lauben himself can grasp thoughts specified in this way. But now he may want to communicate with others. He cannot communicate a thought he alone can grasp. Therefore, if he now says ‘I was wounded’, he must use ‘I’ in a sense which can be grasped by others, perhaps in the sense of ‘he who is speaking to you at this moment’; by doing this he makes the conditions accompanying his utterance serve towards the expression of a thought. (p. 42)

（誰もが皆、他の誰に対しても決して表示されないような特別で、原始的な方法で、自分自身に対して表示されるのである。従って、自分はけがをしたという思想（考え）を Dr Lauben

が抱く時、彼は自分自身に対してのみ表示されるといった原始的な方法によってその思想を多分抱いているのであろう。そして、Dr Lauben 自身だけがこうした方法によって特徴づけられる思想を把握できるのである。そこで、彼が他の人たちと意志の疎通を図ろうとしても、彼は自分しか把握できないような思想を伝達することはできない。従って、彼が「私は、けがをした」と言う場合、彼は「私」を他の人たちにも把握できるような意味で、多分「今（この時点で）、あなたに話している人」という意味で、使用しなければならない。こうすることによって、彼は発話時の諸条件が思想を表現する時に役に立つようにさせるのである。）

(7)における指標詞“I”に対する Frege の説明には、二つの側面がある。一つには、指標詞“I”を使用する時に、話し手が自分自身を思い描き、表示す表示方法は、決して他人が本来の意味で共有できるものではなく、話し手本人しか有することのできない特別で、原始的な方法であり、従って指標詞“I”を含む文によって話し手が表現する思想は、話し手本人しか思い描けず、話し手本人しか把握できない思想であるという側面である。そのような指標詞“I”は、自分自身を思い描く為に使用される“I”、独り言の“I”というもので、その指標詞“I”を含む文によって表現される思想は、伝達不可能な思想と呼ばれる。もう一つには、他人への思想の伝達を可能にさせる為に、指標詞“I”の意味を「今、あなたに話している人」として捉え、他人にも把握できるようにさせ、そのことで指標詞“I”を含む文によって話し手が表現する思想が他人に伝達され、把握されるという側面である。そのような指標詞“I”は、伝達の“I”というもので、その指標詞“I”を含む文によって表現される思想は、伝達可能な思想と呼ばれる。例えば、Dr Lauben が“I was wounded”と発話する時、その文によって表現される思想は、第一の側面から見れば、Dr Lauben 本人しか把握できず、他人には伝達不可能な思想となるが、第二の側面から見れば、指標詞“I”を他人にも把握できるような「今、あなたに話している人」という意味で使用することで、他人にも伝達可能な思想となり、そのような思想を表現する際には、発話時の諸条件が必要となる。

以上の(7)に見られる伝達不可能な思想と伝達可能な思想という二側面に対する解釈・評価は様々であり、例えば、Frege の主張には両側面が存在することを認めた上で、伝達の“I”を他の指標詞と同様に処理できるとし、自分自身を思い描く為に使用される“I”を矛盾を内包するものとして否定する Perry⁽²⁶⁾、伝達可能な思想のみならず、伝達不可能な思想の存在をも認める Frege の主張に相互矛盾はないとしながらも、伝達不可能な思想を例外的な扱いとする Evans⁽²⁷⁾、Frege の主張として一般的に認められている思想の伝達可能性と独立性を弱体化させるのではなく、むしろ伝達不可能な思想を疑問視し、排除すべきであるとする Dummett⁽²⁸⁾、思想の伝達可能性の観点から言えば、Frege の主張に見られる伝達可能な思想と伝達不可能な思想を十分両立しえるものと考える一方で、思想の独立性の観点から言えば、伝達可能な思想を一般的で、伝達不可能な思想を例外的であるとする Noonan⁽²⁹⁾という具合である。しかし、様々ある解釈・評価

の中で、思想の伝達可能性と思想の独立性が Frege の主張であると認めている点では一致しており、ただ思想の伝達不可能性と思想の依存性をどのように処理するのかという点で相違が生まれてくるのである。

なお、思想の独立性・依存性については、ごく簡単に触れるだけにする。文によって表現される思想とは、ある対象物に関する思想のことであるが、その対象物が実在するものだけでなく（例えば、目の前に実在する車について、“This car is not so expensive”（「この車は、そんなに高価ではない」）と言う場合）、実在しないものもある訳で（例えば、幻覚のように、目の前に実在しない鳥について、“This bird is laughing at me”（「この鳥は、私を笑いものになっている」）と言う場合）、従って対象物が実在するかどうかに関係なく、それとは独立して思想は存在することになる。しかし、指標詞 “I” を含む文を話し手が発話する時、その指標詞によって指示される対象物は話し手本人である為、その話し手本人が実在しなければ、その話し手が表現するとされる思想そのものが存在しないことになってしまうので、思想の存在は実在する対象物に依存していることになる。そのような思想の独立性と依存性に対して Frege がどこまで主張しているのかについての解釈は、本稿の検討対象である “Thoughts” では明確にされていないので、省略することにする。

次は、思想の伝達可能性・伝達不可能性の問題である。(7)に関する限りでの Frege 解釈について言えば、Noonan のように、伝達可能な思想と伝達不可能な思想を両立しうるものとして捉えるべきであろう。伝達不可能な思想を否定したり、例外扱いしたりすることが、(7)における Frege の真意を十分表すとは思えないからである。そこで、(7)における Frege の主張を前述の(1)との関係で見ると理解しやすくなるのではないと思われる。(1)で述べたように、それ自体感覚によって知覚することのできない思想は、知覚可能な言語という形に包まれることによって伝達可能になり、その言語の理解を通して思想が把握されるのである。その言語を媒介にする思想伝達過程を(7)に当てはめれば、次のように言えよう。指標詞 “I” を含む文を発話することで話し手が表現する思想は、その指標詞によって指示される対象物が話し手本人である為、本来話し手本人しか自分自身については思い描けず、話し手本人しか把握できないものであり、その意味では伝達不可能であると言えるが、“I” 以外の指標詞、固有名、その他のものと同様に、他人にも把握できるような文という言語の形で発話されることによって伝達可能になるのである。そして、聞き手である他人は、その文の理解を通して、その文によって表される話し手の思想を把握するのである。従って、指標詞 “I” に関する伝達可能な思想と伝達不可能な思想の二側面は、相互矛盾の関係にあるのではなく、むしろ言語を媒介にする思想伝達過程の特徴を表すものと理解できよう。そのように解釈すると、指標詞 “I” を他人にも把握できるような意味で、つまり「今（この時点で）、あなたに話している人」(he who is speaking to you at this moment) という意味で使用しなければならず、その際発話時の諸条件が役に立つと Frege が言う時、指標詞 “I”

(伝達の“I”)の意味を言語的意味と捉え、それに発話時の諸条件が加わることで他人にも把握できるようになるということではなかろうか。というのは、話し手本人しか把握できない思想を言語を通して他人に把握させる為に必要なものは、当然その言語的意味の理解ということになるからである。更に、別の角度から見れば、“I”の意味を「今、あなたに話している人」とすることは、発話の文脈の変化に応じてその指示物に変化しても、決して変わることのない不変的なものとして、単に「発話の主体者、つまり話し手」を示すことであり、従ってそれだけで“I”の指示物が誰であるのか確認できず、発話時の諸条件がそれに加えられて初めて確認できることになるからである(“I”の言語的意味を「話し手」と理解しても、それだけでその話し手が一体誰なのかまでは分からないので)。しかし、Fregeは指標詞“I”の意味を別の指標詞“you”と“this”を使用して説明しているのだから、そのままでは矛盾が生まれてしまう。従って、指標詞“I”の意味を言語的意味として、発話の文脈の変化に関係なく、一定で、不変的なものにする為に、「今、あなたに話している人」ではなく、「発話の主体者、つまり話し手」とすべきであろう。

以上の指標詞“I”(伝達の“I”)に関する Frege 解釈が受け入れられるものであるとすれば、前述の(6)とは食違ってくることになる。

(6) 指標詞 “I” の意味 = $D(D1, D2, \dots)$: 指標詞の指示物の記述 (確定記述)

(7) 指標詞 “I” の意味 = 「話し手」 : 指標詞の言語的意味

その食違いは、簡単に言ってしまえば、Frege の意味概念の曖昧さ (意味の概念に含まれる異なる要素) によるものであろう。勿論、(6)と(7)の間に食違いはなく、首尾一貫していると反論することは可能であるが、Frege 自身の文章をそのままの形で解釈する限り、やはり異なる意味合いが含まれていると考えるしかないように思われる。また、“Thoughts”全体を首尾一貫した主張であると解釈していくことも可能であるかもしれないが、特に(4)と(7)における意味=言語的意味の意義を無視しない為にも、様々な要素を内包するものと捉える方が重要であろう。というのは、Frege の意味の概念が意味=思想を中心にして解釈されるのが一般的であるが、それとは異質な意味=言語的意味という要素も含まれていることを認識することは、Frege 批判を通して出現する新たな指標詞理論が意味≠思想と意味=言語的意味を軸にしていることを考え合わせると、すでに Frege の意味の概念の中にその後の理論的発展の萌芽が見出せると解釈できることになるからである。また、(5)、(6)、そして(7)に見られる表示方法についても、決して一様である訳ではなく、例えば、意味=指示物の表示方法とする点では一致しているが、時間推移の中での指示物追跡による表示方法としてある(5)、指示物の記述(確定記述)によって表示する方法としてある(6)、指標詞の言語的意味として指示物を表示する方法としてある(7)という具合に、異なる方法が存在しているのである。そして、いわゆる Frege 的表示方法と言われている(6)を根拠に Frege 批判を行いながらも、(5)を容認したり、(7)を主張したりする新たな指標詞理論が出現している訳で、表示方法を比較しても、Frege の意味の概念の中にその後の理論的発展の萌

芽が見出せると解釈できるのである。

Frege の論文 “Thoughts” における主要な点を(1)～(7)で検討してきたが（その他の点については、Frege 批判の検討の中で、必要な限り取り上げていくことにする）、あくまでも Frege の主張を Frege 自身の文章にできる限り沿った形で解釈してきた。というのは、Frege の主張の正当性あるいは妥当性に関する評価を行う為には、できる限り正確な Frege 解釈が必要であると考えたからである。そして、(1)～(7)の Frege 解釈を通して判明したことは、首尾一貫した主張というよりはむしろ異なる要素を内包した主張であったということである。それら相互に矛盾しあひ、両立しえない要素を単に欠陥として取り除くことで、首尾一貫した主張として解釈していくのではなく、そのまま受け入れる形で解釈すべきであるし、それはその後の指標詞理論の発展を理解する為にも必要であろう。

4. 反フレーゲ的説明

指標詞に関する Frege 批判は、主に Frege 的意味概念（Frege 自らが主張したもの、更に Frege が主張したと批判家が解釈するものを含む）に向けられる。その批判は、固有名、指標詞などを含む指示一般の Frege 理論（Frege 的意味を意味＝確定記述として捉え、文脈的要素に関係なく、その意味によって指示が決定されると受け取られているので、Frege の指示理論は記述理論と呼ばれている）に対する批判的な流れの一部を成すもので、Keith Donnellan, Saul Kripke, David Kaplan, John Perry, Hilary Putnam などによって代表される指示の新理論家と呼ばれる哲学者達の批判的な動きの一環として捉えられるものである。そして、いわゆる指示の新理論家の出発点とも言える John Stuart Mill との関係で、Frege 対 Mill と見られることがよくある。しかし、意味を全く介せず固有名の指示が可能であるとする Mill 的考えを指標詞の指示にそのまま当てはめて、意味とは全く関係なく、指標詞の指示が可能であると主張することは無理である。というのも、now, I, you, here, there, today, yesterday などの指標詞の意味が全く理解できずに、指示そのものが成り立つかどうかは極めて疑わしいからである。そこで、少なくとも指標詞に関しては、何らかの形での意味の概念が必要になるが、それが意味＝言語的意味そして意味≠思想である。そのように考えてくると、いわゆる指示の新理論家にとっての意味の概念は、批判対象である Frege の意味概念にすでに含まれている要素を発展させてできたものであると解釈することもできよう。ともかく、そうした点も含めて、反フレーゲ的指標詞理論と言われるものを検討することにする。なお、本稿では指標詞に関する Perry・Kaplan の説明と Wettstein の説明を取り上げることにする。

用語上の誤解・混乱を避ける為に、すでに述べたのであるが、再度簡単に触れておくことにする。というのは、3. フレーゲの説明では「指標詞」を使用した。これからは検討資料の論文で使用されている用語をそのまま使用する。特に必要がない限り、4-1：ペリー・カプラ

ンの説明では主に「指示詞」を、4-2: ウェットスタインの説明では主に「指標詞」を使用することになるからである。「指標詞」と「指示詞」は、哲学者によって、また論文によって、厳密に区別されて使用されている訳ではなく、用法的には様々である。そのような用法上の相違はあるが、本稿ではそのことは問題にせず、区別することなく、「指標詞」と「指示詞」を同等なものとして使用していくことにする。

4-1: ペリー・カプランの説明

Perry の “Frege on Demonstratives” と “The Problem of the Essential Indexical”, そして Kaplan の “On the Logic of Demonstratives” の中で示される指示詞の説明を検討することにするが、Kaplan に関しては、簡単に触れる程度にして、Perry の説明を中心に調べることにする。なお、Perry-Kaplan 戦術と Wettstein が呼ぶように³⁰⁾、両者を同質的に扱うことがあるので、その相違は問題にせず、両者を同列にあるものとして話を進めていくことにする。

“On the Logic of Demonstratives” において、Kaplan は Frege の意味と指示の区別を更に小区分する必要があるとして、意味 (sense) を二つの構成要素に区分する。その二つの構成要素が「内容」 (content) と「特性」 (character) である。内容 (命題と呼ばれているもの) とは、文脈との関係で得られるもので、文 “I was insulted yesterday” (「私は、昨日侮辱された」) の内容がある文脈では “David Kaplan is insulted on 20 April 1973” (「David Kaplan は、1973年4月20日に侮辱される」) であるという具合に、同一の文の発話は、絶えずその発話の文脈に関係しているので、必ず同一の内容を表現することにはならない。そして、内容がどのように文脈によって決定されるかを定める要素が特性で、それは意味 (meaning) と呼ばれているものである。例えば、“I” の特性が話し手であるという具合である。

Kaplan の特性 (意味) は、P. F. Strawson の意味 (meaning)³¹⁾ と同様の働き・役割を持つものなのであろう。Strawson にとっては、表現あるいは文に意味を与えることは、その用法に対して一般的な方向性を与えることなのである。例えば、文 “It is raining” (「雨が降っている」) の言語的意味は、雨の降っていることと全く関係ない場面で使用されることは無理である為、その文の使用範囲を示すものとなり、従ってその文の使用方法に対して一般的な方向性を定めるものになるのである。そして、内容がどのように文脈によって決定されるかを定める要素が特性であると Kaplan が言う時、同様のことが考えられる。つまり、それぞれの文脈で文の内容が決定されるが、あくまでもその文の言語的意味が決定される内容の範囲を決めることになり、例えば、“I” が David Kaplan であれ、また他の誰であれ、その文を発話する話し手という範囲内に属するものでなければならないということである。ともかく、文の言語的意味は、文自体が持つ特性であり、文が実際に発話される個々の文脈において、文の内容が具体的に決定されるということになるが、意味 (sense) の構成要素である内容 (命題) と特性 (意味 (meaning)) は、Frege の意

味の概念に見られた意味(sense) = 思想と意味(sense) = 言語的意味(meaning)を組み合わせれば、内容が前者の思想に、特性が後者の言語的意味にそれぞれ対応すると解釈できよう。そして、同様のことがPerryにも見出される。Perryの「情報」(information)と「役割」(role)がそれである。

“Frege on Demonstratives”において、Perryは詳細にFrege批判を行っている。その批判の主な対象になるのが、次のようなFrege像であると思われる。つまり、意味=思想を主張する時、単に意味=言語的意味だけではそれを満足させることはできない為に、意味=完全な意味として捉えざるをえなくなり、しかも完全な意味=確定記述とすることで初めて意味=思想を手に入れるというFrege像であり、それに向けて批判を加えるのであろう。Perryの描くFrege像を少し具体的に考えてみよう。例えば、村越行雄という人物がこちらに向かって来るのを見て、話し手が聞き手に“He is coming”(「彼がやってくる」)と言う時、その文の言語的意味(「彼がやってくる」)が理解できても、それで話し手の表現しようとしている思想を聞き手が把握できることにはならず、話し手の思想を把握する為には、言語的意味以上の完全な意味(文の内、指示詞を除く部分の対象外になるので、指示詞の完全な意味)を理解しなければならないが、指示詞“he”の言語的意味(「彼」)やその指示物(村越行雄)だけではその指示詞の完全な意味としてまだ十分とは言えないので、例えば、“Yukio Murakoshi is coming”(「村越行雄がやってくる」)では、同姓同名の人物がいたり、何度か会ったが、名前を知らなかったり、その他の理由で、指示詞“he”の完全な意味としては十分とは言えないので(Fregeにとっての意味は、それだけで指示物を確認・決定できるものでなければならないので)、その完全な意味を指示物に関する確定記述とするしかなく、例えば、“The man who is teaching English at Atomi University is coming”(「跡見大学で英語を教えている人がやってくる」)のように、指示詞“he”の完全な意味を村越行雄という人物に関する確定記述とするしかなく、そうすることで文“He is coming”によって話し手が表現しようとする思想が文“The man who is teaching English at Atomi University is coming”の意味と一致することになり、意味=思想が手に入ることになる。以上の解釈が正しければ、それがPerryの描いたFrege像であり、そこに問題があるとしてFrege批判を行ったのがPerryであると言えよう。従って、Fregeにとっての指示詞は、指示物だけでなく、完全な意味をも提供するものであるが、指示詞の言語的意味とその指示物だけで完全な意味を与えることができない為に、その指示物に関する記述を必要とすることになり、結局思想と意味を同一視するFregeは、完全な意味を確定記述として示さなければならないのであるとPerryが言う時、上記のような状況を頭に描いていたのであろう。

意味=思想を維持していく為に、意味を完全な意味として、更に確定記述として捉えていったところにFregeにとっての指示詞の問題点があると批判したPerryは、自らの理論を展開していく。指示詞に関するPerryの説明は、基本的には意味≠思想を主張することにあり、意味を役割

として、そして思想を情報として捉え、それら役割と情報の関係によって指示詞を分析していくものである (Frege の「意味」と「思想」に代わるものとして「役割」と「情報」という用語を採用する一方で、Perry 自身「意味」と「思想」を使用するが、それらは Frege 的意味と Frege 的思想と一致するものではない)。

[役割] $S(d)$ is true when uttered in context c , if and only if the value of d in c falls under the concept referred to by $S(\)$.⁽³²⁾

(文脈 c における指示詞 d の価値が $S(\)$ に関係のある概念に属する場合、 $S(d)$ は文脈 c で発話されると真となる。)

$S(d)$ は、指示詞 d を含む文 S のことであり、 $S(\)$ は、指示詞を含まない文で、不完全な意味を持ち、従って概念に関わるものである。そして、役割とは、文脈から対象 (指示物、真理値など) へと導く際の規則のことで、前述の Strawson の意味を持つ働き・役割 (言語的意味がその言語の使用範囲を示し、その言語の用法に対する一般的な方向性を決めること) と同様に、言語的意味が言語使用の場面から対象へと導く際の方向性・範囲を決定することなのである (その意味で、言語使用に関する言語規則と解釈すればいいであろう)。従って、指示詞の役割とは、発話の場面からある特定の指示物へと導く際の規則のことで、例えば、“today” が「発話の当日」を、“yesterday” が「発話の日の前日」を、“I” が「話し手」を表すという具合に、その言語的意味は文脈によって変化することはないが、ある特定の文脈で指示物となる特定の日時、特定の人物を決める際の方向性・範囲を提供できることになる。指示詞を含む文の役割 (上記引用の規則) は、発話の場面からある特定の真理値へと導く際の規則のことで、それは指示詞の役割を文の役割に発展させたものである。そして、指示詞の価値 (value) は、ある特定の文脈で実際に指示詞によって導かれる対象 (指示物) のことである。

上記の文 $S(d)$ の役割に従えば、同一の文は、異なる文脈で同一の役割を表すが、異なる真理値を持つことになる。例えば、文 “I am ill” (「私は、病気です」) に関して言えば、指示詞 “I” の指示物が “() is ill” に関係のある概念 (病気であるという概念) に属する人物であれば誰でもよく (単に「(その文を発話する話し手は)、病気です」であって、言語的意味の観点から見れば、病気であるという概念に属する話し手ということしか分からず、話し手の特定化まではいってない)、従っていかなる文脈においても、その文の役割は同一であるが、個々の文脈でその文は真であったり、偽であったりする。ある文脈で Lauben がその文を発話する時、Lauben が病気であるという概念に属するのであれば (Lauben が実際に病気ならば)、その文は真となるが、別の文脈で Lauben が同一の文を発話する時、Lauben が病気であるという概念に属さなければ、その文は偽となる。以上のように、Perry の文の役割は、Frege の文の意味と同様に、真理値を決定する為の方法であるが、前者が文脈から開始する方法であるのに対して、後者が意味から直接開始する方法であると Perry は言う。

[情報] an utterance of $S(d)$ in context c , and $S'(d')$ in context c' , will express the same thought if the (incomplete) senses of $S()$ and $S'()$ are the same, and if the value of d and c is the same as the value of d' and c' .⁽³³⁾

(文脈 c における $S(d)$ の発話と文脈 c' における $S'(d')$ の発話は、 $S()$ と $S'()$ の(不完全な)意味が同一で、しかも文脈 c における指示詞 d の価値が文脈 c' における指示詞 d' の価値と同一の場合、同一の思想を表現することになる。)

文 “Russia and Canada quarreled today” (「今日、ロシアとカナダは仲たがいをした」) が 1976 年 8 月 1 日に発話される時、(i) “Russia and Canada quarreled” という不完全な意味 ($S()$)、(ii) 1976 年 8 月 1 日という日時 (d の指示物) の情報が与えられることになるが、その情報は唯一特定の思想を決定することはないが、情動的に同等な思想の範疇 (a class of informationally equivalent thoughts) を決めることはできる (その範疇の内、具体的にどの思想かは確認できないが)。その意味から言えば、Frege 的な完全な意味を必要とせずに、(i) と (ii) の情報によって思想 (情動的に同等な思想の範疇に属する思想は全て情動的同等物になる) が得られることになる。そして、情動的同等物については、上記の引用で具体的に示される。例えば、1976 年 8 月 1 日に発話される文 $S(d)$ “Russia and Canada quarreled today” と 1976 年 8 月 2 日に発話される文 $S'(d')$ “Russia and Canada quarreled yesterday” は、 $S()$ と $S'()$ の意味 (不完全な意味) が共に “Russia and Canada quarreled” で、同一であり、しかも d と d' の価値が共に 1976 年 8 月 1 日で、同一であるので、それらの文の発話によって同一の思想を表現することになる (文 $S(d)$ と文 $S'(d')$ の意味は異なるが)。つまり、 $S(d)$ と $S'(d')$ の発話によって表現される思想は、厳密な意味で、全ての点で、同一とは言えないが、情動的には同等なものであると言えることになる。そうすることで、Frege 的な意味 (完全な意味、確定記述) と Frege 的な思想 (全ての点で、完全な思想) が避けられることになる。

[役割と情報の関係] 指示詞を含む文の意味を Frege 的な意味ではなく、役割として捉え、思想を Frege 的な思想ではなく、情報 (d の指示物 + $S()$ の不完全な意味) として捉えた上で、意味と思想は同一ではないが、それぞれが独自の働きをし、しかも互いにうまくかみ合いながら機能することになると Perry は言う。Perry にとっては、意味を心に抱くことによって (意味を通して) 思想を把握することがそれである。そして、異なる文脈において、同一の意味を心に抱くことによって異なる思想を把握することもあれば、それとは反対に、異なる意味を心に抱くことによって同一の思想を把握することもあるのである。例えば、Heimson は文 “I am the author of the *Treatise*” (「私は、「人間悟性論」の著者です」) の意味を心に抱いて、Heimson と “() is the author of the *Treatise*” の意味から成る思想を把握することになるが、「人間悟性論」の著者は Hume であるので、その思想は偽となる。しかし、Hume が同一の意味を心に抱いて、Hume と “() is the author of the *Treatise*” の意味から成る思想を把握すれば、その思想は真となる。つ

まり、Heimson と Hume は文 “I am the author of the *Treatise*” を発話する時、同一の意味を心に抱き、同一の思想を思い描くことができると思われるであろうが、実際は二人は同一の意味を心に抱くが、異なる思想を把握することになるのである。そのようにして、Frege 的意味=思想とは反対に、Perry は意味≠思想に最終的に到達するのである。

3. フレーゲの説明では省略したが、人間行動に関しても、Frege と Perry は異なる結論に達するのである。Frege によれば³⁴、人々は思想を伝達し合うのであり、思想を把握し、真と受け取ることによって、決意し、行動することになる。しかし、Perry によれば³⁵、人間行動は思想ではなく、心に抱く意味に結び付くことになる。例えば、A氏とB氏が同時に文 “A bear is about to attack me” (「熊が私に襲いかかろうとしている」) を言う時、二人はその文の意味を心に抱き、同じように身体を丸めて、できる限り動かないようにする。というのは、A氏はAと “A bear is about to attack ()” の意味から成る思想を把握し、B氏はBと “A bear is about to attack ()” の意味から成る思想を把握するので、二人は異なる思想を把握することになるが、二人が同じ行動をするのは、その文に対して同一の意味を心に抱いているからである。従って、異なる思想を把握するが、同一の意味を心に抱き、同一の行動をするのである。しかし、A氏がB氏に文 “I am about to be attacked by a bear” (「私は、熊に襲われそうだ」) を言い、B氏がA氏に文 “You are about to be attacked by a bear” (「君は、熊に襲われそうだ」) を言う時、A氏は身体を丸め、B氏は助けを求める為に、走りだす。というのは、A氏は文 “I am about to be attacked by a bear” によって表現される思想をAと “() is about to be attacked by a bear” の意味から成る思想として把握し、全く同様に、B氏も文 “You are about to be attacked by a bear” によって表現される思想をAと “() is about to be attacked by a bear” の意味から成る思想として把握するのであるが、二人が異なる行動をするのは、二人がそれぞれの文に対して異なる意味を心に抱いているからである。従って、同一の思想を把握するが、異なる意味を心に抱くので、異なる行動をするのである。そのようにして、Frege が意味=思想を堅持するからこそ、人間行動を思想から (それはまた意味から) 説明するのに対して、Perry が意味≠思想を主張するので、思想ではなく、あくまでも意味から説明することになるのである。

“The Problem of the Essential Indexical” については、Perry 自身が認めるように³⁶、「本質的な指標詞」(essential indexicals)が内容的にまだ十分でないこともあり (本質的な指標詞にとって重要な情報的内容が欠落しているという Robert Stalnaker の批判に対して、Perry は認めている)、ここでは本質的な指標詞に関する Perry の考えを簡単に述べる程度にしておく。

ある日、Perry がスーパーマーケットの床に長く続く一筋の砂糖の跡を見つけ、砂糖をこぼしている買い物客に散らかしていることを伝える為に砂糖の跡を追っていくが、驚いたことに、砂糖をこぼしている買い物客が Perry 自身であることを発見した。そこで、Perry は最初買い物客が散らかしていると信じたので、その買い物客を見つけ出す為に、砂糖の跡を追ったが、散らか

しているのが自分であることに気付き (I am making a mess), 砂糖の跡を追うことを止めた。つまり, I am making a mess (私が散らかしている) と信じるに至り, その信念の変化によって行動が変化したのである。以上の例を利用して, Frege 批判を行っていくのである (Frege の「思想」の代わりに, 「命題」が使用される)。文 “I am making a mess” は, それ自体で命題を特定化することはできず (話し手が変われば, “I” の指示物も変わるので), 従って文と命題の間には欠落した概念的要素 (a missing conceptual ingredient: Perry が “I” の指示物であることを決定する為の意味) が存在していることになり, Perry が信じるに至った命題を特定する為に, Frege にとっては, その欠落した概念的要素(意味)を特定化しなければならないことになる。その欠落した概念的要素を埋める為に, 例えば, Perry が自分のことをそのスーパーマーケットにいる唯一のあごひげのある哲学者 (the only bearded philosopher) として思い描くとしても, それによってできる命題 The only bearded philosopher is making a mess (その唯一のあごひげのある哲学者が, 散らかしている) は, 朝にあごひげを剃ってしまい, そのことを忘れていた場合, 偽となってしまう。結局, 指標詞 “I” → (欠落した概念的要素) → 指示物 Perry において, () 内をどのように埋めようとしても, Perry に確実に辿り着く保障はないのであり, それが Frege の問題点である。むしろ, () 内を埋める必要は全くなく, それは指標詞 “I” (“now”, “this”, “that” も同様である) が本質的な指標詞であるからである。本質的な指標詞の場合, たとえ同一の指示物を示すものであっても, 別の言葉に置き換えることで, 行動を説明する効力を失ってしまうので, そうした交換が不可能なのである。その意味で, 文 “I am making a mess” は, “Perry is making a mess” (「Perry が散らかしている」) にも, “The only bearded philosopher is making a mess” にも, また他の表現にも置き換えることができず, もし交換をすれば, その文を発話する話し手の行動が十分に説明できなくなってしまうのである。別の例を使用すれば, 正午に文 “The meeting starts now” (「会議は, 今始まる」) を発話する時, 話し手は正午になったので今すぐに会議に出掛けようとして行動するのであり, 話し手の行動は説明できるが, もし文 “The meeting starts at noon” (「会議は, 正午に始まる」) を発話すれば, なぜ話し手が急いで出掛けていくのか十分に説明できなくなってしまうことになる。なお, 本質的な指標詞に関する Perry の主張については, また後で触れることにする。

以上の指示詞・指標詞に関する Perry の説明を評価するには, Frege 批判 (Perry の描いた Frege 像の正確さ, その Frege 像に向けられた Perry の批判の妥当性) と Perry 自身の理論(役割と情報による指示詞の分析の正当性, 本質的な指標詞の正当性) を区別して考える必要がある。まず最初は, Perry の描いた Frege 像の問題である。**3. フレーゲの説明**においてすでに検討したように, Frege の主張には様々に異なる要素が含まれているが, 単純な分け方をすれば, (2) - (3) - (5) - (6) と (1) - (4) - (7) に区別することは可能であろう。その区別から見れば, 一般的に解釈されている Frege 像 (いわゆる指示の新理論家の描く Frege 像) は, 前者に基づくも

のであると言っても構わないであろうし、後者を排除しているという理由で、正確さを欠いていると言えるであろう。しかし、そうした不正確さは Frege 自身の曖昧さに原因があり、Frege の真意は別にして、ある程度の首尾一貫性を持つ主張として解釈しようとする限り、前者を中心にするのも止むを得ないことかもしれない。但し、後者における言語を媒介にする伝達過程、言語的意味、そして文脈的要素は、無視されるべきものではないが。

一般的に解釈されている Frege 像、同様に Perry の描いた Frege 像を (2) - (3) - (5) - (6) に基づくものであるとすれば、次に問題となるのがそれらに対する解釈の正確さである。ごく単純な要約をすれば、(2) 意味=思想、(3) 完全な意味=完全な思想、(6) 意味=指示物の記述 (確定記述) という要素が存在する。なお、(5) については、単なる指示物の同一性として解釈することも可能であるし、(2) - (3) - (6) との関係から解釈することも可能であるし、また別の解釈も可能である (例えば、Evans) という具合に、多少異なる意味合いが含まれている為、一応区別しておくことにする。そこで、もし指標詞に関する Frege の主張を首尾一貫性のあるものとして捉えていこうとすると、(2) → (3) → (6) という構図 (最終到達点である (6) に至って、固有名に関してと同様に、指標詞に関しても、記述理論が主張されると判断される) が出来上がることになる。しかし、もともと異なる、独立した要素と考えられるもの (少なくとも、そのように解釈すべきであろう) を必然的に相互に結び付く関係として捉え、(2) → (3) → (6) という構図を作り上げると、Frege 自身が描いていた像とは食違いが生じてくるであろう。(2) → (3) → (6) という構図には、(2) ではっきりと主張されている意味=思想から開始し、次に (3) における「全ての点で完全な文のみが思想を表現することになる」という Frege 自身の言葉から、意味=思想と結び付けて、完全な文の意味=完全な思想 (文は思想を表現するが、日常的な (不完全な) 文は完全な思想を表現することができず、むしろ思想そのものを表現できず、完全な文のみが思想を表現することができるという考えに意味=思想を加えれば、完全な文の意味=完全な思想が得られる) が得られ、そこから意味を完全な意味として捉え、最後の (6) において、指示物を決定する唯一の要素としてある意味を完全な意味として捉える為には、指示物の性質に関する記述 (確定記述) 以外には考えられないという流れがある。しかし、(1) ~ (7) は、ただ扱われる内容から判断して、(2) - (3) - (5) - (6) と (1) - (4) - (7) に区別できるというだけで、それらの個々の要素の間には、必然的に相互に結び付く関係ではなく、より緩やかな関係が存在しているにすぎないと解釈すべきであろう (それが Frege の曖昧さでもあり、また Frege の問題点であると言えるのであるが)。従って、(2) → (3) → (6) という強い必然的な相互関係としてではなく (そうなると、その他の全ての要素を排除する結果になってしまう)、(2) - (3) - (5) - (6) という緩やかな関係として捉えるべきであろうし、そのことによって (1) - (4) - (7) が無視されずに済むことになるのである。ともかく、(2) → (3) → (6) という極論とも思える解釈 (意味=確定記述として捉える記述理論) に対しては、Frege を擁護する立場から様々な批判が出されている。例えば、指示物の表示方法

が全て確定記述によって行われる訳ではなく、その証拠として(7)があるとする Evans³⁷⁾、意味が全て確定記述によって表されるという主張は Frege の説明には見られず、まして指標詞を一つも含まない確定記述によって表されるという主張は全く根拠がないとして Perry を批判する Dummett³⁸⁾、意味が全て指標詞を全く含まない確定記述によって表される必要があるとは Frege は一言も言っておらず、それは Frege の思想の差異基準とは両立しえないとして Perry を批判する Noonan³⁹⁾ という具合である。そこには、(6)の解釈に関する対立がある。(6)から意味＝確定記述が読み取れることは明らかであるが、(2)→(3)→(6)という必然的な発展過程の最終到達点として(6)を位置付け、意味＝確定記述が全ての場合に適用できるとするのか、それとも(6)を最終的な結論としてではなく、あくまでも一要素として位置付け、意味＝確定記述が適用できる場合もあれば、そうでない場合もあるとするのかで対立すると言えよう。そして、(6)における意味＝表示方法＝確定記述だけでなく、(7)における意味＝表示方法＝言語的意味もあり、決して一様ではなく、(6)はその他の要素を考慮に入れて考えれば別の解釈が可能である以上、(6)を最終的な結論とし、指標詞に関する Frege の主張を単純に記述理論であると断定するのは無理であろう。結局、Perry の描いた Frege 像（同様に、いわゆる指示の新理論家の描く Frege 像）は、単に(2)－(3)－(5)－(6)に基づくだけでなく、(2)→(3)→(6)という必然的な発展過程を基盤として解釈された Frege 像であると言え、その意味で、正確さを欠いていることになる。

次は、Frege 像に向けられた Perry の批判の妥当性である。様々に異なる、しかもある意味で独立した要素を内包する Frege の説明の曖昧さが存在する一方で、Frege の主張が(2)－(3)－(5)－(6)を核にしていると解釈するのは自然であろうが、(1)－(4)－(7)を排除しない為にも、全体を緩やかな関係にあるものとして捉えるべきであるが、それを Perry が(2)→(3)→(6)としたところに問題があるのである。従って、誤った Frege 像に向けられた Perry の批判には妥当性がないと言えるであろう。では、Frege 自身が主張したかどうかの議論から離れて、確定記述によって表される意味の概念自体に関する評価について、Perry の批判に妥当性があるのだろうか。前掲の例を使用して少し調べてみることにする。

文 “He is coming” によって表現される思想を把握する為には、指示詞 “he” の指示物が特定されなければならないが、指示詞の意味のみによって指示物を特定しようとすれば、指示物の有する性質に関する記述によって指示物を特定しなくなってしまう。従って、指示詞 “he” → 指示物に関する確定記述(D) → 指示物・村越行雄となり、指示詞は確定記述の省略形とみなされる。確定記述は様々であるので、D(D1, D2, …)とする。

D1: “the man who is teaching English at Atomi University” (「跡見大学で英語を教えている人」)

D2: “the man who wrote *The Role of Women*” (「『女性の役割』を執筆した人」)

そこで、D1 によって村越行雄を特定する場合、もしごく最近大学を移っていたり、教科が変わっていたりすれば、不可能になる。同様のことは、誤解、記憶違い、情報不足、その他の理由

で、全ての確定記述に言えるであろう。また、村越行雄を特定するのに、果たして単一の確定記述で十分であろうか。十分でないとしたら、 $D(D1, D2, \dots)$ によって特定することになるが、現実問題として可能性は薄いであろう。別の角度から見れば、話し手は村越行雄の性質（広義に解釈する）について思い描き、指示詞“he”で表示し、聞き手は指示詞“he”によって村越行雄の性質を思い描き、二人の表示方法が同一であれば同一の思想、そうでなければ異なる思想になると Frege はしているが、現実的には話し手と聞き手は様々な性質を思い描く訳で、従って二人は共に $D(D1, D2, \dots)$ を持つことになる。では、その内のどの D を取り出して、問題にするのであろうか。もし $D(D1, D2, \dots) = D(D1, D2, \dots)$ であるとすれば、() 内に D が幾つ入っているのか、各々の D が何であるのか、二人のどの D が一致するのかという疑問が生まれてくる。しかし、確定記述による指示物の特定が全く不可能であるという訳ではない。たまたま話し手と聞き手が跡見大学の村越行雄の英語のクラスに聴講生として出席した場合、 $D1$ によって村越行雄を特定することはできるであろう。ところが、多分そうしたことを意識したのであろうが、最近 Perry は言い方を変えてきている⁽⁴⁰⁾。指示詞の意味が確定記述によって特定されるのかどうか、指示詞が確定記述の省略形とみなされるのかどうかは別に問題ではなく、文脈と関係なしに、指示詞の意味が指示物を決定することはできないということが重要であると Perry は言う。つまり、(2)→(3)→(6)という必然的な発展過程の最終到達点である(6)における意味=確定記述を批判・否定していたのが、(6)を全面否定するのではなく（確定記述による指示物の特定が場合によっては可能であることを多分認めたのであろうし、従って(6)を場合によっては可能であると認めたのであろう）、むしろ(2)－(3)－(5)－(6)の基盤を成す意味概念（文脈的要素を考慮に入れないうで、意味のみによって指示物が決定される）の批判・否定に移行してきていると解釈できよう。そうであるならば、Perry の描いた Frege 像には問題があるが、その Frege 像とは離れて、Perry 自身の問題として、(6)を他の要素との緩やかな関係において捉えるようになっていよう。ともかく、指示詞の意味が全て確定記述によって表されうるという意見も、また逆にそれを全面否定する意見も、そうした両極端な意見に妥当性を見出すのは不可能であり、(6)における意味=確定記述はあくまでも一例として捉えられるべきで、その意味から言えば、(6)を否定することも、肯定することも可能であるということになる。従って、Perry の批判は、もし意味=確定記述の全面否定であるならば、妥当性はないと言えるが、最近の変化を考慮に入れて、意味=確定記述を一つの可能性として認めるのであれば、妥当性はあると言えることになる。

Perry 自身の理論に移ることにする。Frege の主張を(2)→(3)→(6)と解釈した上で(または、最近の変化を考慮すれば、(2)－(3)－(5)－(6)とすべきかもしれないが、まだ Frege の主張の中に(1)－(4)－(7)が含まれていることを認め、評価するまでには至っていない)、その根本的な欠陥を意味=思想にあると判断し、意味≠思想を前提にして Perry は独自の理論を主張していく。Perry の主張は、Frege 自身の説明の曖昧さを取り除いた点で、また言語的意味と文脈的要素の

重要性を認識している点で (Frege の主張の中に含まれていた言語的意味と文脈的要素を前面に出すという点で、ただ Frege 自身の主張から見出すのではなく、むしろ Frege の主張に欠落した要素として解釈しているが)、改善の跡が見られ、評価されるべきものと言える。なお、Perry の理論、そしてまた Frege の理論の正当性に最終的な判断を下す代わりに、具体例を個別に検討しながらどこまで適用できるのかを調べることにする。

例 1 (Perry の例)：港を眺めていると航空母艦「エンタープライズ」の船首と船尾が目に入るが、その中央部分は大きな建物に隠れて全く見えない。船首に名前「エンタープライズ」が見えるので、指を差して見物客に文 S1 “This is the *Enterprise*” (「これが、エンタープライズです」) を言うと、見物客はすぐに受け入れる。次に、船尾を指差して見物客に文 S2 “That is the *Enterprise*” (「あれが、エンタープライズです」) と言うと、今度は拒絶する。⁽⁴¹⁾

例 1 の Frege 的解釈として一般的に考えられているのが、Frege の意味と思想の差異基準によるものである。それによれば、見物客は S1 を真として受け入れ、S2 を偽として拒絶するので、S1 と S2 は異なる意味を持ち、従って異なる思想を表現することになる。それ以外の方法も可能である。例えば、Frege の(6)のケース 2 に従えば、指標詞 “this” と “that” の指示物が同一であることを知らない見物客にとっては、S1 と S2 は異なる意味を持ち、異なる思想を表現することになる。更に、Frege の表示方法に従っても、見物客は指示物の同一性を知らず、同一の表示方法をするのが不可能であるので、同じ結果になる(むしろ、第二・三番目の場合、見物客は S2 を思想を表現するものとは考えないであろう)。しかし、指示物の同一性を知っている話し手から解釈することも可能である。そこでは、話し手が意味と思想の差異基準を使用することはできず、また(6)のケース 2 も使用できないので、表示方法で判断するしかなくなる。Frege の(5)に従えば、指標詞 “this” と “that” の指示物は同一であるが、単に指示物の同一性だけで判断すると矛盾が起きるので、Evans の指示物追跡の方法を使用するしかないことになる。それによれば、話し手は “this” の指示物から “that” の指示物へと追いついていくことができるので、同一表示方法が可能となり、従って S1 と S2 は同一の意味を持ち、同一の思想を表現することになる。以上のように、指示物の同一性を知っている場合とそうでない場合では、異なる解釈が可能になるのである。

Perry に従えば、S1 と S2 は、異なる意味(役割) (指標詞 “this” と “that” の役割は、それらの言語的意味の果たす役割の相違から、異なることになる。Perry の文の役割の規則に従えば、S1 と S2 は、“this” の指示物と “that” の指示物が“() is the *Enterprise*” のエンタープライズであるという概念に属する限り、共に真であるということになるが、“this” と “that” の果たす役割の相違から文全体の役割も異なると考えられる。)を持つが、S1 と S2 の内、“() is the *Enterprise*” の不完全な意味が同一で、しかもそれぞれの指標詞の指示物も共に同一のエンタープライズであるので、同一の思想(情報)を表現することになる。しかし、指示物が同一であることを

知らない見物客はどうなるのであろうか。指示物が同一である限り、区別せずに、同じ扱いを受けるのであろうか。もしできないとしたら、どうなるのであろうか。そこで、一つの可能性として、その見物客にとっては、“() is the *Enterprise*” の不完全な意味が同一であっても、“this” の指示物と “that” の指示物が同一であるとは思えない以上、同一の思想が表現されないと解釈できよう。別の可能性として、意味（役割）を通して思想（情報）に辿り着くのであるが、文の役割の規則に従って、あくまでも文が真である場合にのみ思想に辿り着くと考えて、“this” の指示物がエンタープライズであるという概念に属するので（船首にその名前があったので）、S1は真となるが、“that” の指示物がその同じ概念に属さない（二つの指標詞の指示物が同一でない）と思っているので、いずれかが偽となる為、S2は偽となる為、S2は思想そのものを表現することができないと解釈できよう。

以上のように、具体例を検討すると、Frege 的解釈にしても、Perry 的解釈にしても、曖昧な部分（様々な解釈の可能性）が存在すると言える。そして、思想に関して言えば、上記の解釈が正しいとして、指示物の同一性を知っている話し手にとっては、同一の思想が表現されることになり、その同一性を知らない見物客にとっては、異なる思想が表現されることになる（または、思想自体が表現されない）という点で、両者は一致すると考えることもできよう。勿論、Frege における意味＝思想と Perry における意味≠思想という大きな相違点はあるが。

例 2 (Perry の例)：大学の学部会議が1976年9月15日正午に予定されている。その日の正午に文 S3 “The meeting starts now” (「会議が今始まる」) が言われ、また文 S4 “The meeting starts at noon, September 15, 1976” (「会議は1976年9月15日正午に開始する」) が言われる。⁽¹²⁾

Frege の意味と思想の差異基準に従えば、日時を忘れていたりして、聞き手は一方を真として受け入れ、他方を偽として拒絶することが可能である為、文 3 と文 4 は異なる意味を持ち、従って異なる思想を表現することになる。また、Frege の(6)のケース 4 に従えば、同一の指示物であっても、異なる言葉で表示されれば、異なる意味を持ち、異なる思想を表現することになるので、“now” と “at noon, September 15, 1976” が同一の日時を表すものであっても、異なる表現で表示される為、S3 と S4 は異なる意味を持ち、異なる思想を表現することになる。そして、例 1 における二つの指標詞の関係とは異なり、“now” と “at noon, September 15, 1976” の関係では、話し手側から見ても、聞き手側から見ても、また指示物の同一性を知っているにしても (Evans の指示物追跡の方法は、基本的には指標詞にしか利用できないであろうから)、知らないにしても、同じ結果になるであろう。

Perry に従えば、S3 と S4 は、異なる意味（役割）を持つが、S3 と S4 の内、“The meeting starts ()” の不完全な意味が同一であり、しかも “now” と “at noon, September 15, 1976” が同一の日時を表すので、同一の思想（情報）を表現することになる。では、日時を忘れて、指示物の同一性に気が付かない場合はどうであろうか。例 1 と同様の結果になるであろう。しかし、本

質的な指標詞の概念を使用したら、どうなるであろうか。少なくとも、一つの解決策にはなるであろう。話し手が S3 を言う時、今が1976年9月15日正午であるかどうかは問題なのではなく、“now”を使用することによって、会議が正に今（何年何月何日何時ではなく）始まることを言いたいのであり、そのことで緊急の用事に対する自らの行動を説明するのであり、聞き手も S3 を聞くことで以上のことを理解するのである。従って、“now”以外の言語表現はありえないことになる。その意味で、S3 と S4 は、もともと比較できるものではないことになる。では、“now”を本質的な指標詞として捉えると、S3 によって表現される思想はどうなるのであろうか。Perry の思想(情報)は、“now”の指示物と“The meeting starts ()”の不完全な意味から構成されるが、もし“now”の指示物が1976年9月15日正午であるかどうかに関係なくなると(ただ“now”があるだけで、その指示物は問題外になる)、S3 は思想を表現しないことになってしまうであろう(S3 は意味(役割)を持つが)。結局、Perry の本質的な指標詞の概念は、ある意味で解決策を与えてくれるが、また別の意味で欠陥を示すことになるのである。ともかく、本質的な指標詞の概念は、多少 Frege の(6)のケース4に相通ずるものがある。

次の4-2: ウェットスタインの説明において、更に具体例の検討を続けていくことにするが、例1と例2を検討しただけでも、Frege 的解釈と Perry 的解釈の相違が明らかになったであろうし、その相違の原因が意味=思想と意味≠思想の相違によることも明らかになったであろう。そして、方法論的な有効性から見れば、言語的意味と文脈的要素を積極的に取り入れたという点で、Perry 的方法の方が有利であると思われる。というのは、指標詞の場合、特に言語的意味と文脈的要素の働き・役割が重要な位置を占めるからである。但し、Frege 的解釈にも利点はあるし(例1の場合、(6)のケース2、例2の場合、(6)のケース4)、Perry 的解釈にも欠点はある(指示物の同一性を知らない場合、本質的な指標詞)のである。

4-2: ウェットスタインの説明

指標詞に関して、いわゆる指示の新理論家に属する Wettstien は、Mill 的な立場に立って Frege 批判を行い、指示の新理論家の中でも、特に Perry と Kaplan を高く評価し、そして自ら「指標指示の文脈的説明」(a contextual account of indexical reference)と名付けて、自らの主張を展開していく。“Indexical Reference and Propositional Content”において、文(可変的な文)の発話によって伝えられる情報は、発話される文のみならず、その発話の文脈の特質にも依存するのであるが、その情報がいつも必ず、しかも明確に言葉(不変的な文)に置き換えられると主張するのが Frege, W. V. O. Quine, Jerrold Katz などであり、それに対抗するのが Wettstein であるとし、具体的に Frege を批判しながら、指示物の特定が指示物の性質の記述によらなくても、発話の文脈によってできると Wettstein は主張する。また、“How to Bridge the Gap between Meaning and Reference”において、指示の新理論家よりも更に指示物決定の社会性を強調し、文脈的

手掛かり (contextual cues : 言語的文脈) を中心的位置に据え, その上文脈外的手掛かり (extracontextual cues : 社会的, 文化的文脈) を加えながら, 指標指示の文脈的説明 (「文脈」を言語的, 社会的, 文化的文脈全てを含むものとして, 「指標」を純粋な指標詞と指示詞を含むものとして使用している) を展開する。更に, “Has Semantics Rested on a Mistake?” において, Frege の主張の問題点を指摘し, 指示の新理論家の中でも, 特に高く評価する Perry と Kaplan の主張にその解決策を見出せるとし, その上で Perry と Kaplan が持つ問題点を指摘しながら, 自らの主張の正当性を説明する。

最初に, Wettstein の指標指示の文脈的説明について見てみよう。Wettstein にとっての根本的な問いは, 指標詞の意味と指示物の間に存在する溝を何で埋めるのかということである。その答えは, 一般的に解釈されている Frege 像 (指標詞の意味=指示物の性質に関する記述) における指標詞の意味→確定記述→指示物という関係に見られる確定記述によってではなく, 指標詞の意味を言語的意味とし, 確定記述に代わるものとして, 聞き手にとって入手可能な発話における文脈的特質によって溝を埋め, 指標詞の意味→文脈的特質→指示物とすることである。そこで, 指示物が具体的に何であるのかを決定する文脈的特質が文脈的手掛かりと呼ばれるのであるが, その文脈的手掛かりについての Wettstein の説明を少し具体的に見てみることにする。まず最初に, 文脈的手掛かり (狭義に解釈して) として, 強勢, 抑揚, 述部などが挙げられる⁽⁴³⁾。例えば, 述部に関しては, 息子に “That is the most disgusting thing I have ever seen” (「それは, 私が今まで見た中で一番吐き気を催させるものだ」) という時, 息子が手に持っている死んだ, 腐りかけている蛙について話し手が話していることを, 息子はその文の述部によって与えられる手掛かりを基にして (それが全てではないが) 知るのである。更に, 指を差したり, 指示する人物が目に入る唯一の人であったり, 人が大勢いても, その人物が話し手と聞き手の方に歩いてくるとか, 手を振っているとか, 何か目立つ特徴を持っている例が挙げられる。次に, 文脈外的手掛かりとして, 会話の話題になっていたり, 最近注意を引いたものであったり, その他の数多くの例が考えうるとしている⁽⁴⁴⁾。

指標詞を含む文が発話される文脈において, 聞き手は入手可能な手掛かり (単一手掛かりの場合もあれば, 複数手掛かりの場合もある) で指示物を決定する訳で, 聞き手に指標詞の指示物を分からせる為に提供する手掛かりに対しては, 話し手は意図した手掛かりだけでなく, 意図しなかった手掛かり (単に手を伸ばしているのに, 指を差していると勘違いされる場合など) にも全て責任を負うことになる。また, 意図した手掛かりであっても, はっきりしない場合がある。Kaplan の指差しの不確定性を例として挙げながら, 指を差す方向には多くの対象物が存在し, 指示する対象物がどれなのかはっきりしない場合があるが, 多くは発話される場面と発話される文の述部によって明らかになるのであるが, それでも不明な場合, 全ての責任は話し手にあるので, 発話そのものに欠陥があり, 結局話し手は何も主張していないことになるが, 現実的には聞

き手は聞き返してくるであろうし、それに対して話し手が必要な情報を提供すればいいのであるとしている。従って、意図しなかった手掛かり、手掛かりの不確定性などを理由にして、指標詞の意味→文脈の手掛かり→指示物という関係の中に別の要素を組み入れることを主張する考えには全く根拠がないと Wettstein は断言するのである⁴⁵⁾。

Wettstein の指標指示の文脈的説明において、指標詞の指示物決定の際に、文脈の手掛かりがいかに重要な位置を占めているかが示される。そのような文脈的要素は、Frege の主張に曖昧で、暗示的な形で内包されていたものが、Perry の主張で重要で、積極的な位置を占め、Wettstein の主張で更に重要で、中心的な位置を占めることになったと言えよう。そして、指標詞の場合、特に基本的で、単純なケースの場合、話し手と聞き手の目の前にある対象物を指示する訳で、文脈的要素が中心的な位置を占めるのは当然のことであるし、その意味から言えば、Wettstein の主張は評価されるべきものであると言えることになる。しかし、文脈の手掛かりの範囲をどこまで拡大できるのか、個々の発話で文脈の手掛かりを具体的にどのように位置付けるのかなど、解決すべき問題は残されている。

次に、Frege と Perry-Kaplan の主張に対する Wettstein の評価を検討することにする。なお、**4-1：ペリー・カプランの説明**の場合と同様に、最終的な判断を避けて、Wettstein の具体例を挙げながら調べることにする。そして、「フレーゲの難問」(Frege puzzles) と Wettstein が呼ぶ Frege にとっての三つの問題を中心に調べることにする。また、今まで述べてきた Frege と Perry の主張を比較する意味で、最初に簡単な Frege と Perry の解釈を書いておくことにする。

例3：敵の捕虜収容所に入れられている兵士が、仲間の兵士が自分を救い出しにやってくるのと幻覚を感じ、文 S5 “You are wonderful” (「君はすばらしい」) を言う。⁴⁶⁾

実在しない対象物を指示物とする幻覚に関して、Frege の場合 (指標詞 “I” は除く)、指示される対象物が実在するかどうかに関係なく、思想は存在することになるので、たとえ指標詞 “you” の指示物である仲間の兵士が単なる幻覚であっても、S5 は意味を持ち、思想を表現することになる。しかし、Perry の場合、意味 (役割) に関しては、指標詞 “you” の指示物がたとえ何であれ (“you” の言語的意味の範囲に属するものであれば何でもよく、具体的な指示物の特定は必要ない)、それが “() is wonderful” のすばらしいという概念に属する限りでは、S5 は真となり、意味を持つことになるが、思想 (情報) に関しては、“() is wonderful” の不完全な意味は存在するが、“you” の指示物が実在しないので、結局 S5 は思想を表現できないことになる。

Wettstein は例3を第一の「フレーゲの難問」とする。幻覚には意味も、思想も存在するという Frege の考えをどのように処理するかが問題となるが、指示物が存在しないという理由で、単純に命題 (Wettstein は「思想」ではなく、「命題」を使用する) が全く表現されないとすることには反発するが、Perry と Kaplan の主張には Frege の要求に答えうるものがあるとして Wettstein は評価する。どのように処理し、評価するかは、決して簡単なものではない (例えば、伝

説上の人物・動物，神話，小説などの登場人物，宇宙人などの想像上の人物などのように，実在しない対象物について話すことは，日常的によく行われており，一般的には固有名が使用されるのであるが，指標詞の例としての幻覚との共通点もあるであろう)。そこで，そのような発話を単純に意味もなく，思想もないと断定するのは，勿論ばかげており，Frege 的な考えを何らかの形で受け入れる必要があるが，その一方法として Perry の解釈が挙げられる。つまり，確定的な思想が表現されることはないが，意味を持つことで明確な認識内容が確定されるところによって (Frege の意味と同様に，Perry の意味も真理値に関わるものである為，発話される文の意味を理解した上で，真として受け入れたり，偽として拒絶できる)，Frege 的な考えがある程度は取り入れられることになるであろう。いずれにしても，実在しない対象物を指示物とする場合，指標詞の使用される幻覚は勿論のこと，固有名の使用される伝説，神話，小説，想像上の話，架空の話は尚更のことであるが，意味も，思想も存在するという Frege の考えは全面的に否定できるものではなく，どのような形であれ，取り入れられることがどうしても必要になってくるのである。そして，あくまでもその一つの方法として見る限り，Perry の主張は十分評価できるものであると思われる。

例4：著名な言語哲学者に襲われそうになっている人を見かける。その現場を直接見るのではなく，何枚かの鏡を通して，その鏡に映っている現場を目撃する。ところが，その襲われそうになっている犠牲者は，実は自分であるが，本人は気が付いていない。そこで，文 S6 “He is about to be attacked by a neo-Fregean” (「彼は，新フレーゲ主義者に襲われそうになっている」) と文 S7 “I am about to be attacked by a neo-Fregean” (「私は，新フレーゲ主義者に襲われそうになっている」) が発話される。⁴⁷⁾

例1と類似のケースである。その相違は，話し手本人が鏡に映っている人が自分であることに気が付いていないことである (例1では，話し手は指示物の同一性を知っており，聞き手がそれを知らない)。なお，例1ですでに述べているので，指示物の同一性を知らない話し手側のみを調べることにする。Frege に従えば，話し手は鏡に映っている人が自分であることに気が付いていないので，当然 S6 を真として受け入れ，S7 を偽として拒絶することになる。従って，S6 と S7 は，意味も異なり，表現される思想も異なることになる。そのような意味と思想の差異基準だけでなく，表示方法によっても調べられる。但し，例1とは異なり，指示物の同一性を知らないで，Evans の指示物追跡の方法は使用できない。ともかく，表示方法を使用すれば，鏡に映っている人について思い描き，指標詞 “he” でもって表示する方法と，その人とは別人と思っている自分を思い描いて，指標詞 “I” でもって表示する方法は異なる為，S6 と S7 は異なる意味を持ち，異なる思想を表現することになる。また，Frege の (6) のケース 2 を使用しても，同じ結果になる。しかし，問題は指示物の同一性を知らない場合の Perry の解釈であるが，その点は後で触れることにする。Perry の場合，指標詞 “he” と “I” の言語的意味の相違から，“he” の指

示物が誰であれ、その人が“() is about to be attacked by a neo-Fregean”の新フレーゲ主義者に襲われそうになっているという概念に属することで、S6が真になる時と、“I”の指示物が誰であれ、その人が“() is about to be attacked by a neo-Fregean”の新フレーゲ主義者に襲われそうになっているという概念に属することで、S7が真になる時とは異なる為、S6とS7は異なる意味(役割)を持つが、“he”と“I”の指示物が同一で、“() is about to be attacked by a neo-Fregean”の不完全な意味が同一であるので、同一の思想を表現することになる。

Wettsteinは例4を第二の「フレーゲの難問」とする。例3でFregeの考えをある意味で尊重したWettsteinは、例4においては、指標詞“he”と“I”の指示物が同一であるのに、S6とS7によって表現される思想が異なるとするFregeに批判を加え(指示物の同一性を知らないことは無視される)、Perry-Kaplanの方法を採用する。その理由は、S6とS7によって主張される命題(思想)は同一で、単一であるが、指標詞の言語的意味の相違によって、“he”と“I”は同一の指示物を異なる方法で表示することで、異なる認識内容(意味)を持つことになるからであるとされる。そして、Wettsteinによれば、Perryは決して表示方法そのものを否定している訳ではなく、ある特定の対象物にしか当てはまらない、純粹に質的な特質描写として表示方法を捉えているFregeを批判しているのであって、むしろ言語的意味として表示方法を捉えることを主張しているのであるということになる。例えば、“I”は指示物の特別な表示方法を表し、“he”も同様で、従って“I”と“he”は、同一の対象物を指示する為に使用されるが、全く異なる方法で表示することになるのである(“I”は指示物を話し手あるいは書き手として表示し、“he”はその指標詞によって指し示される男性として表示する)。そのようなWettsteinの解釈は、Perryと全く同様で、表示方法=確定記述(文脈的要素が全て除外されるものとして)というFrege像に基づくものであると言えるが、Fregeの(7)においても表示方法=言語的意味という要素は含まれており、またFregeの(6)のケース4においても同一指示物の異なる言葉による異なる表示方法という要素(但し、Fregeの場合、異なる意味と異なる思想になるが、Perryの場合は、意味は異なるが、思想は同一になる)は含まれているのである。更に、Fregeの(1)においては、話し手が自らの思想を言語という形で伝達し、聞き手が言語の理解を通して思想を把握するという言語を媒介にする思想伝達過程が述べられているが、それは言語的意味を通しての思想伝達—思想把握を表すもので、意味を心に抱き、それを通して思想を把握するというPerryの考えと共通するものである。勿論、誤った(むしろ、Fregeの主張に曖昧で、しかも暗示的に含まれている要素を排除して)Frege像に基づくFrege批判、そしてPerry自身の理論とWettsteinの主張、それらは区別して評価されるべきものである。しかし、Perryと全く同様に、Fregeの主張に内包されている(1)–(4)–(7)の要素を排除して、Fregeの主張を批判して、簡単に退けようとするWettsteinには問題があると言えよう。

指示物の同一性を知らない話し手に関するPerryの解釈は、どうであろうか。Wettsteinによ

れば, Perry-Kaplan の思想 (命題) は, (i) 思想が指示物と性質 (述部で述べられる性質) によって特定されること, (ii) 指示物と性質が思想の構成要素であること, (iii) 二つの異なる時点で, 話し手は思想の同一性を認識できる位置にいらなくても, 同一の思想を主張できること, の三つの特徴を持っていることになる。勿論, Perry の思想は, S6 の場合, “he” の指示物 + “() is about to be attacked by a neo-Fregean” で述べられる性質であるから, (i) と (ii) は正にその通りである。しかし, (iii) について言えば, 話し手が思想の同一性を知らなくても, また知る位置にいらなくても, 結果的に S6 と S7 によって同一の思想を主張するのであり, ただ指示物の同一性に気が付かずに, 話し手が異なる思想を表現していると思ひ込んだり, 同一の思想を表現しているのに, 誤って一方を受け入れ, 他方を拒絶することはありえるということになる。もし以上の Wettstein の解釈が正しければ, Perry にとっては, 実際に指示物が同一であることにあくまでも基づいて, 思想の同一性が問題になるのであって, 従って話し手がその同一性を認識しているのかどうかは関係ないことになる。そうであるとすれば, 例4に対する Frege と Perry の解釈上の対立が鮮明になる。つまり, Frege の場合, 話し手が指示物の同一性を知らないからこそ, S6 を真として受け入れ, S7 を偽として拒絶することになり, S6 と S7 は異なる意味を持ち, 異なる思想を表現することになる訳で, その同一性を知っていれば, S6 と S7 を共に真として受け入れ, 同一の意味を持ち, 同一の思想を表現するものとして捉えることになるのであるが, Perry の場合は, 話し手が指示物の同一性を知っているのかどうかは関係なく, あくまでも “he” と “I” の指示物が実際に同一であるならば, 意味は異なるが, S6 と S7 は同一の思想を表現することになり, 指示物が異なるのであれば, 意味は勿論異なるが, S6 と S7 も異なる思想を表現することになるのである。その点から言えば, 話し手と指標詞の関係を中心にする Frege (指標詞の指示物が実際に同一であるのかどうかではなく, むしろ話し手が指示物を思い描き, 指標詞で表示するまでの過程に力点が置かれる) と指標詞と指示物の関係を中心にする Perry (話し手が指示物の同一性を認識しているかどうかではなく, 指標詞によって指示される対象物が実際に同一であるのかどうかに力点が置かれる) という対立が浮び上がってくることになる。そうした意味もあって, Wettstein は Perry-Kaplan の「思想 (命題)」の代わりに, 「事態」(states of affairs) を使用すべきであると言うのであろう (Perry の思想 = 指示物 + 述部で述べられる性質に代わって, 事態 = 対象物 + 性質になる)。というのは, 言語と現実世界の関係 (指標詞と指示物の関係) の重要性を強調する為には, また Frege の「思想」と誤解されない為にも, 「事態」の方が適していると考えからであろう。また, 指示物決定を指標詞の言語的意味 → 文脈の手掛かり → 指示物として捉える Wettstein にとっては, 文脈の手掛かりの果たす役割の重要性を明らかにする為にも, 「事態」は適しているのであろう。そのことは別にして, 個々の発話で話し手が指示物をどのように認識し, どのように思い描くかも当然考慮すべきであるし, 事実例1で述べたような Perry の解釈も可能なのである。

例5：状況は例4と同じ。話し手が文S6 “He is about to be attacked by a neo-Fregean” を発話する時に取る行動は、文S7 “I am about to be attacked by a neo-Fregean” を発話する時に取る行動とは異なる。⁴⁸⁾

行動の説明に関しては、Fregeの場合、思想によって行動が説明されるので、S6とS7によって表現される思想が異なれば、話し手の取る行動も異なることになる。逆に言えば、思想が同一であれば、行動も同一になるのである。つまり、“he”と“I”の指示物が同一であることを知らないからこそ、思想は異なることになり、従ってS6を発話する時に取る行動（例えば、その人に危険を知らせたり、助けを呼びに行ったり、自ら助けたりする）は、S7を発話する時に取る行動（例えば、自分の身を守る為に、助けを求めたり、逃げ出したりする）と異なるのであるが、指示物が同一であることを知っていれば、自分が襲われることを知っていれば、S6を発話する時も、S7を発話する時も、取る行動は同一になる。それに対して、Perryの場合、思想ではなく、意味によって行動が説明されるので、S6とS7によって表現される思想が同一であっても、その意味が異なれば、話し手の取る行動も異なることになる（S6とS7の場合、意味が異なるので、話し手は必ず異なる行動を取るようになる）。そして、Perryにとっての意味は、言語的意味のことなので、文が異なれば、その意味も異なり、従って必ず異なる行動を取るようになる。

Wettsteinは例5を第三の「フレーゲの難問」とし、例4と同様に、Fregeの方法を批判して、Perry-Kaplanの方法を受け入れ、Fregeの欠陥がPerry-Kaplanによって是正されると考えるのである。勿論、例4においてPerry-Kaplanの方法を採用するWettsteinは、当然例5においてもその方法を受け入れることになるのである。しかし、話し手がどのように思い描くかによって（実際の対象物の同一性に関わりなく、また発話される文の言語的意味に関わりなく）、様々な行動を取るとするのか（Frege）、それとも発話の時に使用される文の言語的意味によって、様々な行動を取るとするのか（Perry）、単純に二者択一的に選べるようなものではないであろう。

例3（幻覚）、例4（話し手—指標詞—指示物の関係）、そして例5（人間行動の説明）において、それぞれ求めるものは一つで、それをどのように解釈するかによって、Fregeの解釈が生まれ、またPerryの解釈が生まれ、また別の解釈が生まれるのであって、それらはあくまでも一つの解釈の可能性としてある訳で、その可能性としてWettsteinはPerryの解釈（または、Perry-Kaplanの解釈）を選び、別の人は別の解釈を選ぶのである。つまり、我々の求めるものは、直観的理解によって得られる、一般的に納得のできる結果であり、それをどのように解釈し、どのように論理的に説明できるのかが問題となる。例えば、幻覚の場合（例3）、我々が何かを言う時、実在しない対象物について話をしているのであるから、訳の分からないことを言うにすぎないと単純に片付ける訳にはいかず、何か言っている意味があるのであろうし、更に何か思想（考え）を言い表わそうとしているのかもしれないのである。そこで、Fregeは意味もあれば、思想も言い表わしていると解釈するが、Perryは意味はあるが、思想を言い表わしている

とは言えないと解釈するのである。話し手—指標詞—指示物の場合(例4),我々は何かを言う以上,何かを相手に伝える為に,当然意味のあることを言い(ただ口を動かしている訳でもなく,発声練習をしている訳でもない),自らの思想(考え)を言い表わしているのである。そこで,ある対象物について思い描き,それをある言葉で表し示す話し手側から見て,たとえ指示物が同一であっても,それを知らない話し手にとっては,S6とS7は異なる意味を持ち,異なる思想を表現すると解釈できるし(Frege:意味=思想),また話し手がある言葉で指示しようとする対象物から見て,たとえ指示物が同一であることを話し手が知らなくても,その言葉によって指示される対象物が同一である限り,その言葉の意味は違っても,それによって指示される対象物が同一であるから,S6とS7は異なる意味を持つが,同一の思想を表現すると解釈できるのである(Perry:意味≠思想)。それはまた,指示物が同一であれば,その同一の指示物について語っている思想内容も同一になるはずであるという常識的な考えに対して,話し手側から見れば,たとえそうであっても,指示物の同一性を話し手が知らない以上,S6とS7によって表現される思想は異なるものになるとするFrege,指示される対象物から見れば,実際に指示物が同一である以上,S6とS7によって表現される思想も同一であるとするのが当然で,但しそれらの意味が異なるのであるとするPerryの相違と言える。そして,行動の説明の場合(例5)においても,何かを言う時,ただ言葉を発している訳ではなく,意味のあることを言い,しかもある思想(考え)を言い表わしている以上,当然それに伴う行動を話し手は取るのである。我々の直観的理解によれば,指示物が同一であることを知らない話し手にとって,また異なる言語表現をする話し手にとって,S6とS7を発話する時に取る行動が違ってくるのは当然のことである。その行動の違いをどのように解釈し,どのように説明するかによって,FregeとPerryでは食違いが出てくるのである。言葉で言い表わそうとする思想に基づいて,我々は行動するのであるから,行動の違いは思想の違いによってしか説明できないとするFrege,それでは思想が同じであるのに,異なる行動を取る理由が説明できず,従って言葉の意味で説明するしかないとするPerryという具合である。以上のような解釈の相違は,FregeとPerryの基本的理論(意味をどう捉えるのか,思想をどう捉えるのか,話し手—指標詞—指示物のどこを中心に据えるのかなど)の相違に基づくものであるが,個々の例に対するFregeとPerryの解釈を比較・検討することで,その基本的理論の正当性を判断する為の重要な手掛かりを手に入れることができるのである。

5. 最後に

指標詞・指示詞に関する議論において見られるフレーゲ的主張と反フレーゲ的主張の相違を明確にする目的で, Frege 本人の主張と Perry と Wettstein の主張を比較・検討してきた。特に, “Thoughts” における指標詞・指示詞に対する Frege の説明をかなり詳細に検討したのは, 一般的に解釈されている Frege 像が必ずしも Frege の真意を反映させているものとは言えず, 従って

そのような Frege 像に向けられる Frege 批判自体の正当性が問題になると思われたからである。Frege の(1)～(7)で検討したように、Frege の説明には様々に異なる、しばしば相反する要素が内包されており、そのことが解釈を難しくさせ、誤解と混乱を引き起こしているのは事実であろう。そして、Frege の主張を首尾一貫性のあるものとして捉えようとする限り (“On Sense and Reference” との関係から見て)、Frege の(2)－(3)－(5)－(6)を取り上げて、それらを中心に解釈しようとするのは自然であろうが、もともとかなり緩やかな関係にある(1)～(7)の要素から関連性の強い要素を選び出し、それらを(2)→(3)→(6)という結び付きが強く、しかも必然的な関係として捉え、更に(6)を結論的な位置に据え、Frege の主張を記述理論(意味＝確定記述、表示方法＝確定記述)であると断定するのは多少極論的と言えるであろう(多少極論的であるというのは、事実(6)では意味＝確定記述、表示方法＝確定記述が見られるが、それを最終結論のように捉え、全てに拡大するという意味である)。そのような Frege 像の中で排除される(1)－(4)－(7)こそが、指標詞・指示詞の分析にとって重要な言語の役割、言語的意味、文脈的要素などが暗示的で、曖昧な形で述べられているところなのである。

正確さを欠く Frege 像に向けられる Frege 批判に問題があるとは言え、そのこと自体が、例えば、Perry と Wettstein の独自の主張の否定につながる訳ではない。というのは、Frege の主張に暗示的で、曖昧な形で内包されている言語の役割、言語的意味、文脈的要素などが、Perry の主張では指標詞－指示物の関係から積極的に取り上げられ、重要な位置を占めることになり、また Wettstein の主張では文脈的手掛かりとの関係から更に積極的に位置付けられ、中心に据えられることになるからである。そして、その点は、指標詞・指示詞に関して言えば、評価されるべきものである。例えば、Perry の本質的な指標詞、Wettstein の文脈的手掛かりなどは、指標詞・指示詞を分析する上での一つの有効な手段になりえるものと言えるかもしれない。ともかく、いずれの形であれ、文脈的要素を取り入れ、指標詞・指示詞の指示物が言語的意味＋文脈的要素によって決定されるとする考えは、指標詞・指示詞の分析にとって重要な鍵を握るものと言えるであろう。

(注)

- (1) Blackburn, Simon, *Spreading the Word*, (Oxford: Oxford University Press, 1984), p. 302.
- (2) Frege, Gottlob, “Thoughts”, in N. Salmon and S. Soames (eds.) *Propositions and Attitudes*, (Oxford: Oxford University Press, 1988), pp. 33-55. (独語版1918年, “Der Gedanke: eine logische Untersuchung”, A. M. and Marcelle Quinton の英語版1956年, *Mind*, Vol. 65, pp. 289-311, P. T. Geach and R. H. Stoothoff の英語版1977年, G. Frege, *Logical Investigations*. 上記は英語版1977年を収録)
- (3) Kaplan, David, “On the Logic of Demonstratives”, in N. Salmon and S. Soames (eds.) *Propositions and Attitudes*, pp. 66-82. First published in *Journal of Philosophical Logic* 8(1978), pp. 81-98.
- (4) Perry, John, “Frege on Demonstratives”, in John Perry, *The Problem of the Essential Indexical*, (Oxford: Oxford University Press, 1993), pp. 3-32. First published in *The Philosophical Review* 86, no. 4(1977), pp.

- 474-497.
- (5) Perry, John, "The Problem of the Essential Indexical", in John Perry, *The Problem of the Essential Indexical*, pp. 33-52. First published in *Nous* 13 (1979), pp. 3-21.
 - (6) Wettstein, Howard, "Indexical Reference and Propositional Content", in Howard Wettstein, *Has Semantics Rested on a Mistake?*, (Stanford, California : Stanford University Press, 1991), pp. 20-28. First published in *Philosophical Studies* 36 (1979), pp. 91-100.
 - (7) Wettstein, Howard, "How to Bridge the Gap between Meaning and Reference", in Howard Wettstein, *Has Semantics Rested on a Mistake?*, pp. 69-85. First published in *Synthese* 58 (1984), pp. 63-84.
 - (8) Wettstein, Howard, "Has Semantics Rested on a Mistake?", in Howard Wettstein, *Has Semantics Rested on a Mistake?*, pp. 109-131. First published in *The Journal of Philosophy* 83, no. 4 (April 1986), pp. 185-209.
 - (9) Levinson, C. Stephen, *Pragmatics*, (Cambridge : Cambridge University Press, 1983), 第二章.
 - (10) Dummett, Michael, "Indexicality and Oratio Obliqua", p. 83, p. 128, in Michael Dummett, *The Interpretation of Frege's Philosophy*, (Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press, 1981), pp. 83-147.
 - (11) Dummett, Michael, *ibid.* p. 83.
 - (12) Perry, John, "Frege on Demonstratives", p. 10.
 - (13) Perry, John, *ibid.* p. 4.
 - (14) Perry, John, *ibid.* p. 5.
 - (15) Perry, John, *ibid.* p. 9.
 - (16) Dummett, Michael, *ibid.* p. 87.
 - (17) Dummett, Michael, *ibid.* p. 128.
 - (18) Frege, Gottlob, "On Sense and Reference", p. 62, in P. Geach and M. Black (eds.) *Translations from the Philosophical Writings of Gottlob Frege*, (Oxford : Basil Blackwell, 1960), pp. 56-78.
 - (19) Wettstein, Howard, "Has Semantics Rested on a Mistake?", p. 114.
 - (20) Evans, Gareth, *The Varieties of Reference*, (Oxford : Oxford University Press, 1982), pp. 192-196.
 - (21) Dummett, Michael, *ibid.* p. 86.
 - (22) Dummett, Michael, *ibid.* p. 128.
 - (23) Perry, John, *ibid.* pp. 14-15.
 - (24) Dummett, Michael, *ibid.* p. 85.
 - (25) Dummett, Michael, *ibid.* p. 119.
 - (26) Perry, John, *ibid.* pp. 18-20.
 - (27) Dummett, Michael, *ibid.* p. 121.
 - (28) Dummett, Michael, *ibid.* pp. 121-122.
 - (29) Noonan, Harold, "Fregean Thoughts", in Crispin Wright (ed.) *Frege, Tradition and Influence*, (Oxford : Basil Blackwell, 1984), p. 20, p. 31.
 - (30) Wettstein, Howard, "Has Semantics Rested on a Mistake?".
 - (31) Strawson, P. F. , "On Referring", p. 30, in A. Flew (ed.) *Essays in Conceptual Analysis*, (New York : St. Martin's Press, 1956), pp. 21-52.
 - (32) Perry, John, *ibid.* p. 10.
 - (33) Perry, John, *ibid.* p. 11.
 - (34) Frege, Gottlob, "Thoughts", pp. 54-55.
 - (35) Perry, John, *ibid.* p. 23.
 - (36) Perry, John, "The Problem of the Essential Indexical", pp. 50-52.
 - (37) Dummett, Michael, *ibid.* p. 120.
 - (38) Dummett, Michael, *ibid.* p. 85.

指標詞と指示詞

- (39) Noonan, Harold, *ibid.* pp. 28-29.
- (40) Perry, John, *The Problem of the Essential Indexical*, p. 15.
- (41) Perry, John, "Frege on Demonstratives", p. 13.
- (42) Perry, John, *ibid.* p. 20.
- (43) Wettstein, Howard, *Has Semantics Rested on a Mistake?*, p. 198.
- (44) Wettstein, Howard, "How to Bridge the Gap between Meaning and Reference", pp. 78-79.
- (45) Wettstein, Howard, *ibid.* pp. 79-83.
- (46) Wettstein, Howard, "Has Semantics Rested on a Mistake?", pp. 114-115.
- (47) Wettstein, Howard, *ibid.* pp. 111-112.
- (48) Wettstein, Howard, *ibid.* p. 112.